有巣倶楽部（ありすくらぶ）

美月　純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
有巣倶楽部（ありすくらぶ）

【Ｎコード】
Ｎ０９５２Ｆ

【作者名】
美月　純

【あらすじ】
安藤俊介は5年前すべてのものを失った。気力もなく、「ただ生きている」だけの毎日。そんな俊介はある日一人の老人からチラシを渡される。そして・・・。一人の男が体験した切なく不思議なファンタジックホラー

プロローグ（前書き）

一部性的な描写があります。不愉快に感じる方は読みにならないでください。

プロローグ

本当にこんなことがあっていいのだろうか？

これほどの至福感（しふくかん）を味わうことが、今までの人生の中であっただろうか。

いや、おそらくはない。

そして、この先もずっとありえない。

第一話：意味のない人生

梅雨時のいやにジメジメした日だった。

いつものように、仕事先への道のりを歩いていた。

再び独り暮らしを始めて、もう五年になる。

そして、この道のりを通うのも五年。

仕事先へは、徒歩で通っている。

そう、“独り”になることが決まってから、職場へは歩いて通えるところを探した。

もう、満員電車に揺られて二時間も通うのは、馬鹿らしくなっていたからだ。

そもそも、働くことへの意欲もない。

何のために、働いているのか？

ただ、生きるために食わねばならないから、そのための金を稼ぐ手段として、働いているだけだ。

少し大げさに言えば、すでに僕は「生ける屍」だった。

そう、五年前のあの日、僕の存在は無意味になったからだ。

「もう、やめましょう。これ以上は何を話しても無駄。お願いだか

ら別れてください。」
「なんで？何がいけない？おまえたちのために、ずっとこの十年間働いて、食わせてきただろう。
往復４時間もかけて通勤をして、残業をして、寄り道もせずにまっすぐ家に帰って、それでも午前様（ごぜんさま）、
でも、おまえの話し相手になることは忘れずに、毎日無理をしてでも二人の時間を作ったじゃないか。」

「なに、それ。あたしへ恩着せがましく言うのはよして。あたしだって、ずっと毎日毎日あなたが遅くまで働いてくれているから、
家で一生懸命子どもたちの世話をして、あなたのために食事を作って、独りじゃ寂しいだろうから、遅くまで起きて、
あなたより早く起きて。そういう苦労を言うならお互い様じゃない。」
「だからこそ、おまえのことを思って、外で一生懸命してきたんじゃないか。確かにおまえが寂しかったことはわかっている。
夜の生活がなくなったのも事実だ。でも、おまえへの愛情が冷めたわけじゃない。おまえや子どもたちのことを思うからこそ、身を粉にしてでも働けたんだ。」

「そんなこと。理屈ではわかっている。でも、あたしの心は満たされなかった。確かに話は聞いてくれた。
でも、あたしが求めても・・・女から求めるなんて本当に恥ずかしいのに・・・でも、あなたは拒絶した。
浮気を疑ったことだってある。でも、あなたはちゃんと働いてくれていた。悪いと思ったけど、調べさせてもらった。
あなたの言うとおり真面目に働いて家にまっすぐ帰ってきてくれていた。」

「それがわかっていて、どうして別れなきゃならないんだ。セックスがそんなに大事か？」

「大事よ。あたしだって・・・女だって満たされたい時はあるのよ。わかるでしょ。それにあたしは、あなたより7つも年下なのよ。
三十を過ぎたとはいっても、まだまだ女としてみて欲しかったのよ。あなたの見方は妻として、そして、子どもたちの母親としてしか見てくれてなかった。女のあたしを欲することはなくなってしまった。」
「そんなことはない。だからこそ、おまえと二人だけの時間は作ったじゃないか。一緒に風呂に入ったり、
たまには実家に子どもたちを預けて出かけたり。女としてのおまえを思うからこそ、二人だけの時間を作っていたんじゃないか。
セックスが出来ないのは、ただ、俺が肉体的に疲れきってるだけだよ。それは、何度も言ったはずだ。」

「じゃあ、どうして？どうしてエッチな写真とかビデオとかは、あたしに隠れてこっそり見るの？知っているのよ。
あなたが箪笥（たんす）の中にエッチな本とか漫画とか隠してるの。それにパソコンにだって一杯エッチな写真とか貯めてるの。
確かに浮気はしていないけど、こんなことをされるなら浮気の方がまだまし。だって、実体のない写真やビデオにあたしは、女として負けているのよ。
そうでしょ。そういうことでしょ。」
「ばかなこというな。おまえは男の生理をわかっていない。別に浮気とか、その写真やビデオの女を、好きになってるわけじゃない。
ただ、欲求を満たすはけ口として、手っ取り早いから、見てるだけだ。」

「見て、自分でしてるんでしょ。だったら、あたしの身体を使ってよ。別に欲望のはけ口でもいいわ。あたしを使ってよ。」
「そういうんじゃないんだ。うまく説明できないけど、男には確かに他の女に対する欲望はある。浮気願望だってある。
風俗に行く奴だって大勢いる。でも、妻を持つ者なら妻への罪悪感だってある。だから、そうならないために誰にも迷惑をかけない方法で、
つまり、写真とかビデオとかで済ますんだよ。セックスをするなら、愛情を伴いたいだろう？
そのためには、ゆっくり時間をかけておまえにも満足して欲しいじゃないか。そのためには体力がいるんだよ。愛情を注ぎたいから、力がいるんだ。
でも、今はその力が出ないんだよ。」

「それって、やっぱりあたしに、女としての魅力がないってことでしょう。」
「そうじゃない。」

「いえ、そうよ。結局は、あたしは、エッチな写真やビデオにも劣るってことよ。」
「ちがう！」

「なによ。怒鳴らないで！子どもたちが起きるじゃない！」
「おまえの言ってることは間違ってる。俺は別れないぞ。そんな理由で別れるなんて変だろ。おかしいだろ。よく考えろ！」

「いいえ、もう、無理よ。それに知ってるでしょ。あたしには今付き合ってる人がいるの。もう、知らない振りしなくていいわよ。
その人はちゃんとあたしを身体でも心でも満足させてくれる。あたしはその人と結婚するつもりよ。」
「よせ！やめろ！そんなのは一時の気まぐれだ。もし、結婚したってうまくいきっこない。待っているのは同じ結末だぞ。
男なんてそんなもんだ。いつまでも、おまえの身体を満足させることなんて続きやしない。」

「とにかく、あたしから別れるのだから慰謝料はいいわ。その代わり子どもたちはあたしが連れて行きます。
彼もそれは承諾してくれている。それに、今ある財産は、きちんと二分の一に按分（あんぶん）してもらうわ。
保険とかもすべて解約して現金にしてね。それと、子どもたちへの養育費はお願いします。
別れても父親であることは変わりないのだから、愛情があるなら、それをきちんと示して欲しいわ。」
「恭子？本気か？おかしいと思わないのか？こんなこと。セックスをしなかったからだけで、別れるなんて出来ると思うのか？
結婚はそんなに簡単なものじゃないだろう。」

「簡単なものよ。紙切れ一枚でしょ。それに離婚だって簡単。紙切れ一枚に判を押せば済むことよ。」
「恭子、おまえ、いつからそんな冷たいことを、平気で言える女になったんだ？一緒に暮らしたこの十年もの積み重ねはなんだったんだ？」

「もう、話はいいわ。これ以上二人とも苦しむのはやめにしましょう。とにかくあたしの気持ちは変わらないから。」

こうして、離婚が成立した。

もちろん、その後も話し合い。

と、いっても具体的な離婚についての「協議」だが、結局は妻の言われるままに事は運んだ。

本当は裁判に持ち込むことも出来た。

昔大学では法律を学んでいたから多少の知識はあったので、判例等もみて勝てる裁判ではあった。

場合によっては、逆に相手の男を訴えて慰謝料を取ることだってできた。

でも、何もしなかった。

それは、第一には子どもたちへの影響を考えたからだ。

仲の良かった父親と母親が、裁判などでドロドロした争いをしたら、子どもたちに残る心理的影響を考えると、とてもそんな気にはなれなかった。

もう一つの理由は、正直なところ気力が失せた。

もう、妻の心は俺の元にはないと悟った時、もし、このまま夫婦として生活を共にしても修復することは不可能であろうと思った。

一度離れてしまった心を再び取り戻すことは、相当な力が必要だ。

離婚成立までの半年間に、九キロも痩せた。

世間ではイマドキ離婚をすることなんてそれほど驚くことではない、という認識があるが、やはり、結婚する時の数十倍の労力がいる。

紙切れ一枚に判を押して済むことではないことを、実際に体験してみてわかった。

それから五年、妻は再婚相手と再び別れたらしい。

やはり、僕が忠告した通りになった。

愛情なんて、燃え上れば燃え上がるほど、冷めたときにはその崩壊の速度は速い。

本当の愛情は、時間をかけてゆっくり育てるものだと妻の離婚のことを聞いて教えられた。

その話は子どもたちに聞いた。

子どもとは一年に二度ほどだが、会えることになっている。

その子どもたちへの養育費を払う対価として、面接ができるようにしたからだ。

しかし、子どもたちと会うのは嬉しい反面辛さも伴う。

決して子どもたち自身は幸せではないだろうし、会えばまた別れの時間が来るのだからその都度、子どもたちは泣いていた。

それを見るのは辛かった。
もう、今は二人とも中学生になって泣くことはなくなったが、未だに別れ際は寂しそうな顔をする。

もっとも、良いこともあった。
年に二度しかない貴重な時間だから色々な話を親子でする。

おそらく普通に家庭生活をしていたら、二人とも思春期真っ只中なのだから、反抗期に入り、口もきかないはずだ。
でも、離れているおかげで、逆に子どもたちの方から色々な話をしてくれる。

親子関係としてはかえって良いのかもしれない。

しかし、本当にこの生活がずっとこのまま続くのかと思うと、死にたくなる時もある。

実際に二度ほど自殺も試みた。

でも、死ぬための行動を起こす間際になって、怖くなってやめた。

今の僕には「生きている意味」はない。

でも、死ぬことさえ出来ない。

だから「生ける屍」なのだ。

第二話：客引き

今日は、仕事が早く終わった。
まだ、七時前だ。

食事は毎日外食、あるいはコンビニの弁当だ。
一時(いっとき)頑張って自炊もしてみたが、独りで作って家で食べる食事は味気ない。

食べていても美味しいと感じない。
外食でも同じだが、最近は特に食欲が湧かない。

食べたいと思って食べるのではなく、『食べないといけないから仕方なく食べている』という感じだ。

いつも、通っているラーメン屋に行った。
定食を頼み、タバコをふかしながら待ち、食事を終えて、さっさと出て行った。

店に入っても、他の客が、友人や同僚と酒を飲みながら談笑(だんしょう)している姿を見るのも嫌になっていた。

もちろん、会社の同僚と飲みに行くこともあるが、うちの職場はそれほど親しい関係ではなく、
何か行事でもない限り、皆で出かけることはないし、個人的な付き合いは、それぞれが『遠慮』している。

まぁ、一口で言えばビジネスライクな職場だ。

だから、独りで飯を食うことがほとんどになる。
ただでさえ孤独感を感じているのに、周りが楽しそうな雰囲気だと、余計に嫌になる。

それほど、今の僕は「ひねくれている」のだ。

食事を終えて、いつものように家への道を歩いた。
職場から家へは徒歩で二十分。

ちょっとした「散歩」だが、その帰り道に寄り道をすることはほとんどない。
途中ちょっとした盛り場はあるのだが、特に酒が好きなわけでもない僕にとってはまったく魅力を感じない。

もちろん、そういう盛り場だから、キャバクラとか風俗店とかの客引きもあり、
店先に女の子が立っていて、かわいいコならちょっと行ってみたくなる気にならないわけではない。

でも、すぐに終わった後のことを考えてしまう。
結局は楽しいのはその時間だけのことで、金で買った時間が終われば、元の空しさが再び返ってくる。

むしろ楽しい時間があると余計に空しさを増幅させる。
そのことがわかっているので、あえて、そういう店にも立ち寄らない。

では、性処理はどうするかというと、もっぱら自慰行為だ。
普通は、ビデオやパソコン上でエッチなサイトとかを見つけて「おかず」にするものだが、

妻の言っていたことがトラウマとなって、そういう映像を見ても興奮しなくなってしまった。
だから、主に想像をしてやっている。

「おかず」にするのは申し訳ないが職場のコであったり、テレビに出ているタレントであったりと様々だが、最近はそれも飽きてきている。
まだ年は４０過ぎたところなのに、ほとんど枯れてしまったのか、食欲同様性欲もすっかり息を潜めてしまった。

本当に男としても終わってしまうのだろうか。
そんな恐怖を感じることもある。

いつものように繁華街を通り抜けていると、あっちこっちから客引きの声が上がる。

「お客さん、若いコいるよ。うちは全員が二十代だから、ハズレはないよ。」
ソープの客引きだ。

「お兄さん、ちょっと飲んでいかない？あたしみたいなかわいいコが、大勢いるよ。六十分でたったの四千円だよ。どう？」
キャバクラの客引きで確かに声をかけてくるコはかわいい。

でも、たいてい声をかけてくるコはそれ専門のアルバイトで、中にいるコは全く違うことも多い。と聞いている。
それに、酒は好きではないので、この手の店は全く興味がない。

そんな声をかわしながら歩いていると、目深（まぶか）に帽子を被（かむ）った初老

の男が、僕のそばにスッと近づいてきて一枚のビラを手渡した。
そして、一言も発することなく、通り過ぎていった。

少し不気味な感じだが、どうせ風俗とかの客引きだろうと思い、それほど気には留めなかった。
もらったビラも読まずに捨てようかと思ったが、道端（みちばた）にモノを捨てるのは好きではなかったので、
家で捨てようと思いポケットにしまったまま歩き出した。

途中コンビニで買い物をして、家に着いた。
スーツを脱いでTシャツと短パンに着替えると、いつものようにテレビのスイッチを入れて、
同時にパソコンのスイッチを入れた。

いつもテレビはつけているが音がないのが寂しいだけで、ほとんど映像は見ていない。
パソコンでは、株をやっていて、その日の値動きや関連の情報に目を通す。

この株もただ、年老いていく自分の老後を考えて、少しでも投資とかをしなければと思い始めたことだ。

そうこうしているうちにいつの間にか時間が経って、たいていは夜中の一時頃になり、そのまま眠ってしまう。
しかし、今日は帰りが早かったため、いつもよりは、時間がゆっくりと感じられた。

そろそろ、寝るための身支度（みじたく）をしようと思い、明日着ていくスーツやシャツを選んでいると、
先ほど貰ったビラが、スーツのポケットからはみ出していた。

「ずっとはみ出したまま歩いてたのか？コンビニの店員の女のコに見られたな。恥ずかしいな。」

そんな独り言を言いながら、何気なくそのビラを捨てようとポケットから引き出してみると、

なにやら細かい字でびっしりと書いてある。

普通のビラなら、大きく「六十分　三千円！女のコは全員二十代前半のピチピチ」とか書いてあるだけなのだが、

そのビラは何の見出しもなかった。

そして、一番下のほうに店の名前らしきものが書いてあった。

『有巣倶楽部（ありすくらぶ）』

かなり怪しげだ。

アリスといえばロリコンの代名詞。

もしや、援交の案内とか、その手の非合法な売春（売春自体非合法だが）の案内か？

あまりに字が細かいので、そのビラを手にとって改めて座って読んでみた。

『当店は限られたお客様だけが入店できる会員制の倶楽部です。

お店の中ではゆったりと寛（くつろ）いでお過ごしいただけるように、すべて個室になっており、

さらに入り口から個室へはそれぞれ違う道を通っていただきます

ので、お客様同士が顔を合わせることは一切ありません。

さらに、その中ではご家庭にいるのと同様、どんな食べ物や飲み物のご注文でも受けます。

そして、個室の中で、あなたのお好きな「アリス」を選んで、お時間の許す限り、その「アリス」と楽しい時間をお過ごしいただけます。

つまり、こちらからお時間の制限は一切ございません。

場合によってはお泊りいただき、そこからご出勤されても結構です。

個室にはきちんとした浴室やトイレ、寝室も完備しています。

さらに、下着のお着替えやスーツやネクタイ等もお貸しいたしますので、お客様は何もご用意いただく必要はございません。

お貸ししたお洋服は今度ご来店の際にお返しいただければ結構です。

もちろんクリーニング等の必要もございません。

また、お着替えいただいたご自分のお洋服、下着等はお預かりしてこちらはきちんとお洗濯をした上でお渡しします。

つまり、第二のご家庭と考えていただければ結構です。

それでは、会員になられるための条件を申し上げます。

その一、毎日が孤独で、何度か「死にたい」と考えたことがある方。

その二、毎日職場とおうちを往復されるだけの生活の方。

その三、五年以内にご家庭を失っている方。

その四、食欲がなく、食事をただ義務感だけで行っている方。

その五、性欲も減退気味で、自慰行為のみで処理されている方。
その六、生きていることに「意義が見出せない」方。

以上の条件すべてに該当する方のみが会員資格を得られます。

残念ながら一つでも条件が当てはまらない場合は、当店にお招きすることはいたしかねます。
たいへん申し訳ございませんが、条件が整った時にもう一度ご連絡いただければ幸いです。

それでは、皆様のお越しを心よりお待ち申し上げております。

なお、当店にはあいにくお電話がございませんので、たいへんお手数ですが、
下記メールアドレスにお客様のお名前とご連絡先（携帯可）をお知らせください。

最後に大切なことをお伝えし忘れておりました。

当店ではお費用は一切いただきません。
つまり、無料でございます。

私どもはただあなた様の人生に少しだけでも潤(うるお)いを与えて差し上げることができれば、
それが一番の報酬になります。

あなたの幸せが私どもの報酬です。

あなたの心に空いた隙間(すきま)を埋めさせてください。
ご連絡を心よりお待ちしております。』

なんだこれは？
ばかにしてるのか？
無料（ただ）？
そんな店がどこにある。
しかも、この会員条件はなんだ？
五年以内に離婚？
性欲も減退気味？
生きていることに意義を見出せない？
すべて俺のことじゃないか！
その時、ビラを渡された老人のことを思い出した。
まさか、俺への嫌がらせか？
もしかしたら、元妻がまた探偵を雇って、自分が離婚したことの腹いせに俺への嫌がらせとして、
あの老人を使って仕掛けをしてきたのか？
畜生！馬鹿にしやがって。
いい加減にしてくれ！
怒りが沸々（ふつふつ）とこみ上げてきて、そのビラをクシャクシャに丸めてゴミ箱に放り投げた。
こんな方法で嫌がらせをされるなんて。

自分が離婚したいって言って勝手に離婚して、再婚して、その男に逃げられたのも俺のせいか？

その日は、あまりの怒りに身体が興奮してしまい一睡も出来なかった。

第三話：ご来店

翌朝、眠い目を擦りながら出勤した。

「おはようございます。あれ？安藤さん、どうしたんですか？目、真っ赤ですよ。」

「いや、なんか全然眠れなくて、気が付いたら朝でさ。」

「どうしたんですか？何か悩み事？わたしじゃ役には立たないかもしれませんけど、よかったら相談してくださいね。話すだけでも気が晴れると思うし。」

「いや、ありがとう。別に悩みってことはないよ。大丈夫、ただ、眠れなかっただけだから。」

「そうですか・・・ほんと、わたしじゃ頼りないかもしれませんけど、いつでも言ってくださいね。よかったら今度、飲みにでも連れて行ってください。」

「え？あぁ、ありがとう。俺、酒だめなんだよね。知ってるでしょ。すぐ酔っちゃうから。」

「あはは、そうでしたね。大丈夫ですよ。飲ませたりしませんから。それに酔ったら介抱してあげますから。私のほうがお酒強いですもんね。」

「あぁ、そうだね。うん、考えておくよ。ありがとう。」

「はい、今日も一日頑張りましょう！」

声をかけてくれたのは同僚の木村真由美、入社して二年目の年は、まだ、２３歳だ。

小柄で見た目はけっこうかわいいが、未だに中学生に間違えられると、本人はぼやいている。

今までも、何度か飲み会の席で、俺の傍(そば)で話をしたことがある。考えてみれば、そういう席ではいつも俺の傍にいたような気がする。

ひょっとして惚れられている？いやいや、こんなバツイチの四十男なんて、好かれるわけはない。興味もないのに声をかけられるのは迷惑な話だ。

気持ちを切り替えて仕事に向った。

僕の仕事は、大学時代の法律の知識を活かして、今は、この会社の総務で対外的な法律のことや、社内規定の作成などを任されている。簡単に言えば、リスク管理だ。

といっても離婚のことも響いて出世街道からは完全に外れているので、平社員のままだが。仕事はかなり忙しく、午前様になることも珍しくはない。

特に株主総会や経営会議などの直前は身体が二つも三つも欲しいこともある。会社はそれなりに大きいのだが、最近の緊縮(きんしゅく)財政のためか、ここ二年うちの部署には新しい人員の配置はない。

つまり、先ほどの木村真由美が一番最後の人員増加だ。

今日も、めまぐるしく一日が過ぎた。
いつの間にかオフィスの中には僕だけがいた。

ようやく最後の仕事を片付けてオフィスを出たのは十一時を回っていた。
しかし、こんなに遅くなっても相変わらず食欲はわかない。

でも、なにかしら食べないと体がもたない。
しかし、この時間では、もう店もしまっているので、仕方なくコンビニに寄って、おにぎりとサラダを買って帰ろうとした。

その帰り道、昨日、ビラを渡された老人を見つけた。

「おい！あんた。ちょっとそこの帽子を被ったあんただ！」
そう声をかけて追おうとすると、老人は足早に逃げ出した。

「待て！ちょっと話を聞かせてくれ。おい！」
しかし、老人は老人とは思えない素早さで逃げていく。

追いかけても追いかけても、すぐに建物の影に消えて、見つけるとさらに次の建物の影に隠れる。

まるで、俺が追いかけてくるのを待っているかのように、タイミングを計って見えては隠れ、隠れては見える。

「おい！いいかげんにしろ！」
そう言って、次の角を曲がると目の前に老人が立っていた。

ビックリした俺は、腰を抜かすように地べたに尻餅をついてしまった。

「なんだ。あんた！嫌がらせならやめてくれ。そっとしておいてくれ。妻にもそう伝えろ！
離婚したのは自分の勝手だろう！相手の男に逃げられたのも自分のせいだろう！もう、俺のことはほっといてくれと伝えろ！」

そう、怒鳴り散らしたが、老人は微動だにしない。

「おい、あんた聞いてるのか？」
そういって立ち上がると、老人はさらに僕に近寄ってきた。

「お待ちしておりました。安藤様。こちらが当店でございます。」

そう言われて老人の後ろの看板を見て驚いた。

『有巣倶楽部』

赤いネオンが煌々（こうこう）と照っていた。

俺も、もう五年も住んでいる街なのでたいていの場所は知っていたし、この辺りも土地勘がないわけではない。
でも、こんな店は初めて見た。

「どうぞ、安藤様。あなた様のお越しを心よりお待ち申し上げておりました。」
「俺を？なんで俺の名前まで知ってるんだ。やっぱり妻の差し金か？」

「いえいえ、あなた様の前妻（ぜんさい）のことなどさっぱり存じません。私どもは今のあなた様の幸せを願ってお待ちしておりましただけです。」

「何を言ってるんだ。よしてくれ。俺のことは構わないでくれ。」

「おやおや、本当にお疲れのようですね。一刻も早く安藤様に、安らぎと至福の時をお与えしなければなりませんね。

とにかく、一度この扉を潜(くぐ)れば、私どもの真意がご理解いただけると思います。どうぞ、中へ。」

本当に俺にはもう構って欲しくなかった。

どうせ何をしたって幸せなんて感じない。

ただ、空しいだけだ。

このままそっとしておいて欲しかったがどうしても老人は譲らなかった。

「とにかく、一度で結構です。もちろん料金等一切いただきませんから。お気に召さなければいつでもご退室いただいて結構です。お引止めはいたしませんから。」

「本当に帰してくれるんだろうな。中へ入ったら怖いお兄さんたちが出てくるなんてことはないだろうな。」

「ホーホホッ、そのような類(たぐい)の低俗なお店ではございません。選ばれた紳士のみが許される場所ですから。」

「わかった。一度だけ見てやる。」

あまりの、しつこさに根負けしたのと同時に、これほど言われると少しだけ興味が出てきた。

それに、どうせ、失うものなどない。

ヤクザが出てきて殺されようが、この世に未練はないのだから。

「どうぞ、どうぞ。お待ちしておりましたから。」
ドアを抜けると、そこは細い廊下が続き、右へ左へと枝分かれしていた。

初老の男は、その迷路のような廊下を迷うことなく進んでいった。
時間にすれば1・2分ではあったが、相当奥に進んだとき、急に老人が立ち止まった。

「こちらが、あなた様のお部屋でございます。」
「あなた様のお部屋？俺専用の部屋なのか？」
「左様（さよう）でございます。どうぞ、お入りください。」
そういった初老の男はドアを開き僕を招き入れた。

部屋の中は、薄暗く目が慣れないため様子がよくわからなかった。

「いらっしゃいませ。」
足元で声がしてビックリして後じさると、そこには、まだ幼い少女が正座をして三つ指をついていた。

「あ、あぁ、君は？」
そう聞いた僕に、後ろで初老の男が答えた。

「あなた様のアリスでございます。あなた様のお世話をさせていただきます。何なりとお申し付けください。もし、お気に召さなければ代わりのアリスをお届けします。」
そう説明を受け、もう一度座っている少女を見ると僕を見つめ、にっこりと微笑んだ。

初老の男がドアを閉めていなくなると、アリスが立ち上がり僕の

手を引いて部屋の奥へと招き入れた。

「どうぞ、リラックスなさってくださいね。ここはあなただけのお部屋ですから、誰も来ることはございませんので、安心して過ごしてください。」

そういいながら、僕を部屋にあるソファに座らせた。

「何かお飲みになります？」

「え？あぁ。じゃあ、水を。」

「はい。お水ですね。少々お待ちください。」

アリスは立ち上がると奥の部屋へと消えた。

僕はいま置かれている状況を冷静に考えようと努めた。ここはいったいどこなのだ？あの少女は？

見た感じ中学生か、もしかすると小学生？まさか、その手のロリコン専門の売春宿なのか？じゃあ、あきらかに犯罪じゃないか。俺はどうすればいい？

そんなことをぐるぐると頭に浮かべているとアリスが戻ってきた。

「はい、お水です。どうぞ。」

僕は自分を落ち着かせるために、グラスに注がれた水を一気に飲み干した。

「いったい、君は何をやっているんだ。年はいくつなんだ？」

「え？何をって・・・あなた様のお世話をさせていただくんです。年は十二歳です。」

「じゅ、十二歳？小学生か？いったい何をやってるか、わかってる

のか？」
「え？ですから、あなた様のお世話を・・・あなた様が満足してここでお過ごしになれるように、お世話をさせていただくのですが。」
キョトンとした顔でアリスが答える。

「学校は？家の人は知っているのか？まさか家出してるとか？」
「ガッコウ？イエノヒト？えっと、おっしゃる意味がわかりませんが、とにかく落ち着いてください。もう一杯お水をどうぞ。」
差し出されたグラスを再び受け取り一気に飲み干した。

二杯目の水で少しだけ落ち着いた。
そして、頭の中である思いが交錯した。

考えてみれば生活には何の張りもなく、生きてる意味も見出せない。
ここで犯罪を犯そうが、誰一人迷惑をかける人間もいないし、悲しむ人間もいない。

そうだ。

ここでこの少女と好きなことをやっても誰も咎(とが)めるものはいないんだ。
そういう生活に溺れるのも悪くないかもしれない。

そう思うと不思議と気持ちが落ち着いた。
そして、アリスと呼ばれる少女をじっくりと見つめた。

身長は百五十センチほどだろうか、小柄な感じだが、フワフワとした薄いネグリジェのような服から突き出た足はとても美しく長くスラッと伸びていた。

同じく肩からすらりと伸びた腕は華奢(きゃしゃ)ではあったが、透き通るような白さだった。

そして、まっすぐに切りそろえられた前髪がそう思わせているのかも知れないが、人形のような顔立ち。

吸い込まれそうな大きな愛らしい瞳に、スッと整った鼻、控えめに付いている唇は化粧をしているのか、うっすらとピンク色に輝いている。

美しい。

改めてみてみると魅力的な少女だ。

しかし、美しくはあっても十二歳という年齢が俺の理性をかろうじて保たせていた。

「あのぅ。お名前で呼んでもいいですか？あ、嫌なら結構です。ただ、いつまでもあなた様では・・・あなた様もリラックスできないのではないかと思いまして。」

「え？名前、あぁ、いいよ。安藤、安藤俊介だ。」

「俊介様ですね。じゃあ、俊(しゅん)ちゃんって呼んでいいですか？」

「しゅ、俊ちゃん？」

ちょっと身体の力が抜けた。

娘くらいの年齢の少女に「俊ちゃん」と呼ばれるとは思ってもみなかった。

「ダメ・・・ですか？」

上目遣(つか)いに懇願してくるアリスが妙に愛おしくなった。

「いいよ。それで。そう呼んでくれていいよ。」
「ほんと！うれしい！俊ちゃん！」
そういうといきなりアリスは僕に抱きついてきた。
まだ幼いとはいえ、十二歳の身体は半分大人の色香があった。
薄手の服から感じられる胸は膨らみ始め、腰にはややくびれもあり、とても柔らかく温かかった。
そして、ほのかに甘くミルクのような香りがした。
「俊ちゃん。このあとどうする？お風呂に入る？」
来た！と思った。
このあと風呂に入り、ついにこの少女を犯してしまうのか。
しかし、抱きつかれてからは、すでに自分の中の理性を打ち破りそうなのを感じていた。
こんな風に性欲を感じるのは本当に久しぶりだ。
「あ、あぁ、じゃあ、風呂に入ろうかな。」
「うん、じゃあ、ちょっと待っててね。今お湯加減見てくる。」
そういうとアリスは嬉しそうに飛び起きると、奥の部屋に小走りにかけていった。
ふと冷静になって部屋を見回した。
いったいここはどういう構造の建物なんだ。
部屋全体は薄暗く、壁一面にワインレッドのベルベットのような素材の壁紙が貼られている。

ここはいわゆるリビングになると思うが、結構広い。
物はそれほどないが、ソファとテーブル、大型の液晶テレビにパソコンまで置いてある。
しかし、窓はなく外の様子は全くわからない。
そして、それぞれリビングに続いて左側と右側には奥の部屋があるようだ。
向って右はさっきアリスが水を持ってきてくれたから台所があるのだろう。
そして、今アリスが向った左側は風呂等があるのだろうが、では寝る部屋は？
寝室はあるのだろうか？確か案内には泊まれるようなことも書いてあったが・・・。
「俊ちゃん！お風呂ちょうどいいよ。さぁ、いこうよ。」
そういうとアリスは、嬉しそうに僕の手を引いて、奥の部屋に導いていった。
奥は意外と広く廊下のようになっていて、リビングからニメートルほどのところに洗面所と脱衣所、そしてその奥にはかなり広い浴室があった。
そして、廊下の突き当りにはまだ部屋があるようだ。
「はい、ここにバスタオルおくね。それと下着の替えね。あ、俊ちゃんはトランクスでいいの？」
「え？あぁ、トランクスでいいよ。ブリーフはちょっとね。」
「ふぅん、ま、いいや、じゃあ、先入ってて、あとで背中流してあ

げるね。」
「あ、あぁ。」

そういうとアリスは忙しそうにリビングに戻っていった。
言われたとおり、浴室に入った。

広々として、うちのマンションの風呂よりかなりいい感じだ。
浴槽も広く足を伸ばしてゆったりと入れるサイズだ。

とりあえず頭を洗い、身体を洗っているとアリスが入ってきた。
入り口に背中を向けていたので、入ってくるところは見なかったが、頭の中は裸のアリスを思い浮かべ、気持ちが高揚するのを感じた。

「お待たせ〜。あん、もう身体洗ってるの？背中流すっていったのにぃ。」
「あはは、ごめんごめん、俺、浴槽に入る前に身体洗うのが習慣なんだ。」

「そうなんだ。俊ちゃんはきれい好きだね。」
なんだか恥ずかしくてアリスを見ることができなかった。

「でも、背中はまだみたいだね。じゃあ、洗うね。」
そういうと手を伸ばしてきたアリスはポンプ式のボディシャンプーから、適量を手のひらで受けると、僕の背中にゆっくりと両手で円を描くように洗い始めた。

「俊ちゃんの背中、きれいだね。すべすべする。」
「え？そうかなぁ。きれいっていうのも変だけど、まぁでも年だから肉がついて醜(みにく)いでしょ？」

「そんなことない！きれいだよ。それに広いね。男の人ってやっぱこういう背中なんだ。」
アリスはなんだか感心するように言った。

アリスの手が心地よい。
柔らかく、小さな手が僕の背中を、上から下へクルクルと動くとなんだか全身の力が抜けて、とてもリラックスした気分になった。

「はい、じゃあ流すね。シャワー、シャワーっと。」
アリスが僕の目の前に立ち上がった。

思わず凝視してしまったが、期待とは裏腹（うらはら）にアリスはタンクトップにショートパンツという姿だった。
かなり期待していただけに、すっかり裏切られた気分だった。

「ん？どうしたの？」
僕の表情を見て、アリスが不思議そうに僕の顔を覗き込んだ。

しかし、そこには全くの疑いを持たない純粋無垢（じゅんすいむく）な瞳が僕を見ていた。

「いや、なんでもないよ。流してくれるかい？」
「はーい！お湯加減いいかな？はい、シャーっとね。」

無邪気に僕の背中を流すアリスは全くの子どもだった。

「はーい、きれいになったよー。湯船に入ってくださーい。よーくあったまってね。」
まるで子ども扱いだ。

しかし、そう言われて悪い気分はしなかった。
むしろ自分も子どもに戻ったような妙な感覚になったが、それがかえって心地よかった。

「どうですか、お湯加減は？」
「あぁ、いいよ。でも、アリスは入らないの？」

にこにこと湯船につかる僕を見ているアリスに聞いてみた。

「え？いっしょに？やだぁ。俊ちゃんて、えっち！あたしだって女の子なんだから、男の人と一緒にお風呂なんて恥ずかしくて・・・入らないよぅ。」
なんだかわけがわからなくなった。

お風呂に入らない？
では、この後も期待したようなことはないのか？

では、いったいここはどういうところなんだ？
風俗ではないのか？

そんなことを考えている僕を尻目にアリスは言った。

「じゃあ、あったまったらリビングに戻ってね。何飲みたい？ビールとか？」
「え？ん、じゃあ、ビールを。」

「うん、わかった。じゃあ、あとでね！」
そういって、踵（きびす）を返したアリスは、そのスラリとした足を見せつけながら、浴室のドアから出て行った。

いったい、なんなんだ。
このあとどうなるんだ？

なんだか混乱している自分が、おかしくなった。
風呂からあがり、用意してあったバスローブに着替えるとリビングに戻った。

「あ、いいお湯だった？はい、座って。」
再びソファに座ると、用意されていたビールを注がれた。

「ありがとう。」
そういってグッといっぱい飲み干すと、体中にビールの冷たさが広がって気持ちがよかった。

「わぁ、いい飲みっぷりだね。はい、もう一杯どうぞ。」
そういって再びビールを注いだアリスは、嬉しそうに僕を見つめている。

「そうそう、おなか空いてない？ご飯は？まだだよね。なに食べたい？」
「え？あぁそう言えば晩飯はまだだった。そうだな・・・何か中華が食べたいな。酢豚とかチンジャオロースとか。」

「中華ね。了解！じゃあ、今作ってくるね。テレビでも見て待ってて。」
そういうとリモコンでテレビを付けたあと、アリスは再び台所があるであろう右手の廊下に向った。

テレビではちょうどニュースをやっていた。

どこそこで殺人があっただの、どこかの国で紛争があっただの、相変わらず暗い話ばかりだ。

でも、ここにいるとそういう現実からは、離れているような感覚になる。

外が見えないせいもあると思うが、何か世間とは隔絶された雰囲気がある。

「お待たせー、ほぅら、おいしそうでしょ。うまくできたよ～いっぱい食べてね。」

「うわぁ、すごいなぁ、こんなに作ったの？」

その量は軽く三人前はあった。

「アリスも、一緒に食べるんだよね？」

「わたし？わたしはいい。俊ちゃんのために作ったんだから、いっぱい食べて、多かったら残してもいいから。ちょっと張り切って作りすぎちゃった。」

そう言って、ペロッと舌を出すアリスがとてもかわいらしかった。

いつの間にか、この少女に惹(ひ)かれている自分に気がついた。

「あぁ、じゃあ、いただきます。ん？うまい！すごいね。ほんとにうまいよ！」

「ほんと！うれしい！あたし初めてだったから上手にできるか心配だったんだ。よかったぁ。俊ちゃんに喜んでもらえて。」

そう言うとアリスは、ホッとしたような表情を浮かべ、その後、とても幸せそうな顔をした。

食事を済ませると、アリスは、片付けのためにまた台所に向った

が、
ほどなく戻ってくると、僕が座っているソファに一緒に腰掛けて、身体を摺り寄せてきた。
「一緒に座っていい？」
「あぁ、もちろん。」
そう言うと、さらに身体を摺（す）り寄せてきて腕を組んできた。
「なんだか落ち着く。わたしね、ほんとは今日、凄く緊張してたの。だってどんな人が来るかわからなかったから。
怖い人だったらどうしようとか。でも、俊ちゃんでよかった。優しいし、話しやすいし。ありがとう俊ちゃん。」
「え？いやぁ、俺のほうこそ、こんなにリラックスできたのは久しぶりだよ。俺さ、実は離婚してて・・・。」
「しっ！いいの。そういうことは話さないで。わかってるから、俊ちゃんのことは何でも知ってる。
ほんとは名前も知ってたけど、いきなりは失礼だと思ったから聞いたの。でも、聞く前から『俊ちゃん』て呼ぼうって決めてたんだよ。」
「え？そうなの？なんだ。まぁ実は俺も緊張してたから、俊ちゃんて呼ばれて、ホッとしたよ。」
「ほんと？！よかったぁ。ここではね。俊ちゃんが思いっきりリラックスしてくれればいいんだよ。好きなように、のびのびとね。」
「うん。ありがとう。すごくリラックスできたよ。」
「泊まっていくよね？」
「え？あぁ、うん、でも、明日着ていく服とかネクタイとか・・・。」

「大丈夫。そうだ、ちょっと来て。」
そういうとアリスは立ち上がり僕の腕を引っ張って先ほどの浴室の方の廊下に導いた。
そして、突き当りの部屋に連れて行かれた。
「ほら、このクローゼット見て。」

そこは思ったとおり寝室だった。
広さは十畳以上ありそうで、大きなダブルベッドがあり、壁際は天井までの高さのクローゼットになっていた。

開いてみると、そこにはスーツが十着以上並べられ、ネクタイも数十本、ワイシャツや靴下、靴まで用意されていた。

「すごいね。これならここから会社に行けるね。」
「ほんと？じゃあ、そうしようよ。ずっとそうしよう。」
アリスは僕の腕にぶら下がるようにしながら、嬉しそうに僕が泊まることを勧めた。

「わかった。そうするよ。今日は泊まって、明日はここから会社にいこう。」
「やったぁ、じゃあ、明日もね。明日もそうして、会社からはここへ帰ってきて。」

「え？ここへかい？」
「そう、ここはもう俊ちゃんの家だよ。わたしと俊ちゃんのおうちなの。だから、ここへ帰ってきて。」
しばらく考えたが、どうせ家に帰っても何もすることはない。

それにここへ帰ってくれれば、迎えてくれる人がいる。
そう思うと何も迷うことはなかった。

「わかった。そうするよ。明日もここへ帰ってくる。」
「やったぁ！うれしい、俊ちゃん大好き。」
そういうと僕の腕をぐいっと引っ張って僕のほっぺたにキスをした。

なんだか凄く気恥ずかしい気分だった。
幼稚園のころ、大好きな女の子にキスをされたような感覚だった。

「じゃあ、明日も早いからそろそろ寝ようか。」
アリスに促されて寝支度を整えた。

先にベッドに入っていると、あとからアリスが部屋に入ってきた。
かわいらしい動物のプリントが施されているパジャマを着ていた。

「入っていい？」
ちょっと恥ずかしそうに聞いてくるアリスがたまらなく愛(いと)おしかった。

「うん、どうぞ。」
できるだけ冷静を装っていたが、僕の男の部分は、もうはち切れそうだった。

「失礼しまーす。あは、俊ちゃんが入っててくれてたからあったかい。」
そういうとアリスは、僕の身体に自分の身体を摺り寄せてちょうど肩の辺りに頭をくっつけてきた。

「うんとね。お願いしていい？」
上目遣いにアリスが聞いてきた。

「ん？なに？」
「うんとね。腕枕してもらっていい？」
願ってもないことだ。

正直腕のやり場に困っていた。
腕枕をすれば、自然な形でアリスと抱き合える。

「もちろんいいよ。おいで。」
そう言うと、アリスは恥ずかしそうに、頭を浮かせて僕の腕の中に入ってきた。

「うれしい。優しくこうされるの、わたし夢だったの。凄く気持ちいい。」
「そうなの？腕枕ぐらいなら毎晩してあげるよ。」

「ほんと？！うれしい。ありがとう俊ちゃん。」
そう言って、アリスはさらに僕に身体を近づけてきて、二人の身体は隙間なくぴったりとくっついていた。

僕自身が感じるくらい心臓の音が早く力強く脈打っている。
同時に、下半身に熱いものが降りていくのを感じる。

しかし、ほんのひとかけらだが、理性が残っていたため、このままアリスを押さえ込もうかどうか、しばらくの間、迷っていた。
しかし、据え膳食わぬはなんとかと思い、腕枕をしている右手に力を込めてアリスの身体を抱きこんだ。

そして、唇を奪おうとアリスの方を向いたが、そこには幸せそうに寝息を立てて眠っているアリスの寝顔があった。

「ふぅ。何してるんだ俺は・・・。」

そうつぶやきながらも、眠っているアリスの寝顔を見て正気を取り戻したことに後悔はなかった。

むしろ何もしなくてよかった。

こんなに信頼してくれているアリスを、裏切ることをしなくてよかったと心から思い、なんだかホッとした。

そして、その夜は義務感からではなく、心からゆっくりと眠れた。

第四話：日常の中の非日常

「起きて～、朝だよ～、ごはん出来てるよ～。」

アリスの声で、目が覚めた。

枕元に置いてあった腕時計を見ると、ちょうど七時だった。

眠い目を擦りながら起きてリビングに行くと、そこにはきちんと朝食が用意されていた。

トーストに目玉焼きにソーセージ、サラダにヨーグルト、それにオレンジジュースとコーヒー、ちょっとしたホテルの朝食並だった。

「アリスは？もう食べたの？」

「うん、わたしは済ませたよ。今日もお仕事なんだから、しっかり食べてね。」

朝食をきちんと食べるのは何年ぶりだろう。

離婚して以来、まともに朝食を摂ることをしていなかった僕は、『食事を用意されている』という喜びで、少し感動さえ覚えた。

朝食を済ますとシャワーを浴び、身支度を整えて出かける準備をした。

「今日は何時ころ帰る？」

今日のアリスは、キャラクターもののかわいいTシャツに、デニムのミニスカートをはいていた。

ほんとに普通の小学生だ。

「あ、うん、なるべく早く戻るよ。七時くらいには。」
「ほんと！じゃあ、先にご飯食べる？お風呂にする？」
「うん、今日は先に食事をとろうかな。」
「うん、じゃあ作っておくね。何がいい？」
「そうだな、今日は日本料理がいいかな。魚とかお浸しとか。」
「お魚ね。わかった。じゃあ、気をつけて行ってきてね。」
そういうとアリスは背伸びして僕のほっぺたにキスをした。
まるで新婚夫婦だ。
「じゃ、いってきます。」
そういって部屋から出ると驚いたことにすぐに道路に出た。
確かに夕べは店の入り口から迷路のような廊下を通って来たのに。
振り返るとそこは二階建てのアパートのような建物になっていた。
「夕べは暗かったから気づかなかったのかな。」
そうつぶやきながら、時計を見るとすでに八時半になっていた。
ふと我に返り会社へ向った。

会社に着くといつものように同僚たちが出社してきた。
「おはようございます！」
「あっ、おはよう。」

明るく声を掛けてきたのは木村真由美だ。
エレベーターに乗り合わせた。

「あ、なんだか安藤さん、今日は元気ですね。」
「え、そう？いつもと変わりないよ。」

「そうですかぁ、なんだかいつもより肌つやがいいですよ。」
「肌つや？そ、そうかな。」

「はい、女は敏感なんですよ。男の人の体調も一目でわかるんです。特に・・・。」
「ん？特に？」

「あ、なんでもないです。着きましたよ。どうぞ。」
「ん？あぁ、お先に。」

そういってエレベータを先に降りた。
オフィスの入り口はすぐなので、木村真由美とその間は会話することもなくオフィスに入った。

入るとすぐに先に来ていた同僚たちから挨拶をされて、それに応えつつ席に着いた。
さっき木村真由美は「特に」のあと何を言いたかったのか？

もしかすると「好きな人」という言葉が続いたのだろうか。
勘が悪いほうではない僕は、木村真由美が好意を持ってくれていることを確信した。

少し離れた席に座っている彼女を見ると、隣の同僚と談笑してい

た。
明るく笑う彼女はとても可愛らしい。
普通の男なら彼女と付き合いたいくらいは思うだろう。
「安藤君。」
課長の声で現実に引き戻された。
「はい？何でしょうか？」
「あぁ、この前頼んでおいた例の件だけど、進捗は？」
「あぁ、社内規定の改訂についてですね。０次案ならできてます。これです。」
「ん、ほう、さすがに仕事が早いね。君ももっと欲を出せば出世するだろうに。」
「いえ、僕はこのままが一番いいんです。」
「そうか、あとでゆっくり見させてもらうので預かるよ。」
「はい、お願いします。」
課長の皮肉にももう慣れた。
二言目には「君もやる気を出せば出世する。」といって出世のできない部下を皮肉（ひにく）るのが趣味なのだ。
どうせやる気を出しても離婚のことが響いて、いわゆる「人間的には不完全」というレッテルをいただいているので、
うちのような体質が古い大企業では、そういうことが未だに出世に影響する。
それをわかっていて、そういう類（たぐい）の人間に皮肉を言ってストレス

解消をしているのだ。
しかし、『生ける屍』を自認している僕には『馬の耳に念仏』だ。
「安藤さん、また、課長のいじめですか？」
いつの間にか、木村真由美が傍に来て僕の耳元でつぶやいた。
「え？あぁ、もう、慣れてるよ。」
「ほんっとに嫌な人ですよね。あたしもこの前、『木村君は早く結婚しないのかね。女の幸せは出世する男と結婚することだよ。』ですって。はっきり言ってセクハラですよね。」
本気で嫌な顔をして、訴える彼女がおかしかったので、少し笑ってしまった。
「安藤さん、笑い事じゃないですよ。社内規定にセクハラのこと入れてください。」
「うんうん、わかったよ。確かにそれはセクハラに値するね。前向きに検討しよう。」
「もう、冗談じゃなくて、他の人だって課長の嫌がらせには、不満タラタラなんですから。ちゃんとそういうことを正すのが社内規定でしょ。お願いします。」
「わかった。真面目に考えよう。」
ちょっと本気で怒り出した様子なので、僕も襟（えり）を正して言った。
「わーい、さすが安藤さん。だから、好きです！」
そう言って真由美は恥ずかしそうに、踵（きびす）を返して自席に戻った。
なんだか、人生が好転してきたように思えた。

その日も残業して、会社を出たのは、八時を少し回ったところだった。
外の季節は春に向っていたが、夜はまだ肌寒く感じた。
いつもの帰り道だったが、今日はアリスのいる部屋に帰れると思うと、なんだか少し気持ちが高揚していた。
昨日老人が逃げて行った道を辿ると確かにそこには赤く煌々（こうこう）と光ったネオンで『有巣倶楽部』と掲げられた看板があった。
入り口にはあの初老の男が立っていた。
「安藤様、お帰りなさいませ。どうぞ。」
そういうと扉を開けて、また、細い迷路のような廊下を案内された。
「こちらでございますね。どうぞ今宵（こよい）もゆったりとお寛（くつろ）ぎください。」
そう言って老人は、元来た廊下を帰っていった。
部屋に入るとアリスが、またきちんと三つ指を突いて待ち構えていた。
「お帰りなさいませ。」
そういって顔を上げてにっこりと微笑んだ。

本当に可愛らしい。
娘と変わらない年齢ではあるのだが、充分に女を感じさせる。
僕自身気づかなかったが、僕には、ロリコンの要素があるらしい。
最も男にはマザコンの要素も、ロリコンの要素もあって不思議はない。
ただ、それが強すぎて犯罪を起こしたり、結婚してマザコンと知って離婚したなんて話になるだけだ。
おそらく、僕のこの感覚もごく当たり前に男が持ち合わせている感情の一つに過ぎないのだ。
そんな自己肯定をしている僕を、アリスは不思議そうなクリクリした瞳で見つめていた。
「どうしたの俊ちゃん？なんかわたしの格好、変？」
今日のアリスは朝とは違って、ミニのチャイナドレスのような服を纏(まと)っていた。
「いや、すごく似合ってる。かわいいよ。」
「ほんと？！うれしい！！」
そういうと、アリスは飛びつくように抱きついてきた。
そして、僕の腕を引っ張ってリビングに誘った。
「ジャジャーン！ほら、すごいでしょ？」
「うわ！すごいね。これ全部アリスが作ったの？」
「うん、おいしそうでしょ。三時間もかけちゃった。」

リビングのテーブルには、一面に料理が用意されていた。
注文通り、日本食を中心に、焼き魚から刺身、てんぷらまで用意されていて、ちょっとした日本料理店の会席料理並みだった。

「ほら、今日は日本酒も用意したんだよ。俊ちゃんは、お酒弱いから、一本だけだけどね。」

そういう、ちょっとした心遣いが嬉しかった。
気分を盛り上げる上でお酒は必要だが、僕の体調のことまで気遣ってくれるのは本当に嬉しい。

「着替えてきて、ちょっとお酒あっためてくるから。」

そういうと、台所に消えていったアリスと反対側の廊下に向かい、着替えを済ませて戻ってくると、アリスがちょこんと向いのソファに座ってお酌の準備をしていた。

座ると「どうぞ。」といってお酌をしてくれた。
「おっとっと。」と、お決まりの台詞をはいた僕は、自分が滑稽に思えたが、気分はとてもいい。

お猪口いっぱいに注がれた日本酒を飲み干すと、酒が体の芯を下っていき、まさに五臓六腑に染み渡る感覚がした。

「さ、冷めないうちに食べてね。」
「うん、あ、うまい！この煮物うまいね。味が濃くもなく薄くもなくちょうどいいよ。」

「ほんと！うれしい！一生懸命作った甲斐があるわ。俊ちゃんて、

ほめ上手！」
「いや、お世辞じゃないよ。味噌汁もうまい。なんかおふくろの味って感じだよ。」
「ほんと？お母様の味に似てる？」
「うん、なんか懐かしい感じ。実家にいるようでホッとするよ。」

実際に、実家にはもう何年も帰ってない。
実家は、静岡なのでそう遠くではないのだが、離婚以来足が遠のいてしまっている。

正直なところ親には申し訳ない気持ちしかない。
孫の顔を見るのを楽しみにしていた両親から生きがいを奪ってしまったのだから。

僕は一人っ子なので、他の兄弟が穴埋めをしてくれるわけでもないため、余計に罪悪感を感じて自然と足が遠のいてしまっている。

「どうしたの？なんだか寂しそう。」

そんなことを、考えているのを察したアリスが声を掛けてきた。

「ん？あぁ、なんでもないよ。大丈夫、あまり、味噌汁がおいしいから、ボーっとしちゃって。」
「うそ、いいんだよ。あたしには何でも言って。愚痴でも、仕事であった嫌なことでも、俊ちゃんの辛かったことや頭にきたことでも何でも言っていいんだよ。」

「うん、ありがとう。味噌汁の味でね。実家のこと思い出しちゃって。」

それから、離婚してから実家に足が遠のいている話等、自分が辛かったことを滔々（とうとう）と語り出してしまった。

「俊ちゃん、辛かったんだね。」

そういうとアリスは、僕の頭をすっぽりとその小さな体で抱いて自分が泣き出した。

「ありがとう、アリス。気持ちを吐き出せたよ。大丈夫だよ。もう、泣かないで。」

「ごめんね。泣きたいのは俊ちゃんなのに。あたしが代わりに泣いちゃった。」

そういって涙を拭（ぬぐ）って、ティッシュで思い切り鼻をかみだした。

そういう姿は、子どもそのものだが、その様子がとても愛らしかった。

「ごめんね。食事中なのに。」

「いいよ。そういうアリスの姿がかわいい。」

「えへ、子どもだよね。でも、俊ちゃんの気持ちを一番わかるのはわたしだから。いつでも俊ちゃんは無理をしないでわたしに何でも吐き出してね。」

「うん、こうして話ができるだけでも全然今までと違うよ。気持ちがホッとする。」

本当に不思議なことに、心からストレスが消えていくのを感じた。

まるで、アリスが流した涙と共に消えてしまったようだ。

「そう言ってくれるとうれしい。わたしも幸せを感じられるの。」

『わたしも幸せを感じられる。』

その時は、何気なく聞いていた台詞だったが、後にその言葉に大きな意味があったことに今は全く気づかなかった。

「俊ちゃん、お風呂入る？」

食事の後、二人でソファで寛ぎながらテレビを見ているとアリスが声を掛けてきた。

「うん、そうだね。そろそろ入ろうかな。」

「じゃあ、支度してくるね。」

そういって立ち上がったアリスのチャイナドレスから、スラリと伸びた真っ白な足に自然と目がいった。

昨日は理性で抑えたが、正直アリスを抱きたいと感じていた。

こんな幼い子に性欲を感じるのは、おかしいのかもしれないが、それほど魅力を感じていたのも事実だ。

それに、これほどの性欲を感じたのは久しぶりのことで、体が自然と彼女を求めていた。

そんな気持ちも知らず、アリスが風呂の支度ができたと、奥の廊下から声を掛けてきた。

「はい、バスタオルと下着ね。バスローブはここに置くね。また、

背中流すから身体は洗わないで待っててね。」
そういうと、アリスはリビングに戻っていった。
風呂に入ると、いつものように頭を洗って髭を剃った。
ほどなくしてアリスが入ってきた。
驚いたことに、今日はスクール水着を着ている。
アリスの幼いながらも膨らみかけた胸や、スレンダーなボディラインがくっきりと見えて理性が崩れそうになった。
そんな気持ちを知ってか知らずか、アリスはいつものペースで僕の背中を洗い出した。
「はーい、俊ちゃん、シャワーしますよー。シャーっとね。」
そう言って、シャワーで泡を流していくアリスに僕に対する警戒心など全く感じられない。
「どう、この水着姿、かわいいかな?」
僕の気持ちなど、お構い無しに聞いてくるアリスが、少し憎らしくさえ感じた。
しかし、できるだけ理性を保ちながら応えた。
「うん、すっごくかわいい。抱きしめたくなっちゃうくらい。」
気持ちを抑えながらも、それとなく欲望を出してみた。
「ほんと!うれしい、じゃあ、今日はこのまま一緒に湯船に入ってあげるね。」
「え?一緒に?いいの?」

「うん！」
屈託なく微笑む彼女に性の知識など全く感じられなかった。
それだけに、どう対処していいのか正直困った。
そうこうしてるうちに背中を流し終わった僕の手を引いて一緒に湯船に入った。

彼女は僕の体を見ても何も感じないのだろうか？
実は、僕の下半身はすでに臨戦態勢に入っていたのだが、そこを見ても何も感じない様子で普通に湯船に向き合って入っている。

そして、いきなり手で水鉄砲をして僕にお湯を掛けてきた。
「きゃはは！俊ちゃんに命中～！なかなか正確でしょ。」
「やったな。こいつ！お返しだ。」

そういって僕も、水鉄砲をしてアリスの顔めがけて放ったが、的が外れてアリスの膨らみかけた胸に命中した。
「いやぁん。俊ちゃんのエッチ！おっぱいに当たったよ。」
「ごめん。顔に当てるつもりだったんだ。」
「きゃはは、俊ちゃんかわいい！照れてる。」
「なんだよ～、大人をからかってるでしょ。アリスは俺を馬鹿にしてる？」
「そんなことないよ。かわいいから、かわいいって言っただけ。そんな俊ちゃんが大好き！」
「ほんと？じゃあ、キスさせてよ。アリスとキスしたい。」

「え？キス？やだぁ、恥ずかしいよ。」
そういうと急に、顔を伏せて黙り込んでしまった。
「だめ？好きなのにキスしちゃだめなのかな？」
僕は少し食い下がってみた。
しかし、アリスはずっと黙り込んでいる。
「アリスは男の性欲ってわかる？」
そういうと伏せていた顔を起こして僕を見つめた。
「男は目の前に好きな人がいて、こんな状態でいると、どうしてもしたくなっちゃうんだよ。」
「キス、したくなっちゃうの？」
「うん、キスだけじゃなくて・・・その、ほら、エッチもしたくなっちゃう。わかるかな？」
「うん、なんとなく・・・聞いたことはある。」
「でしょ、でもアリスはまだそういうこと、したことないよね？」
「うん、ない。そんなこと考えたこともなかった。」
「そうだよね。でも、俺はアリスが好きでアリスも俺を好きだよね。」
「うん、俊ちゃんのことは好きだよ。」
「じゃあ、そういうことするのは、自然なことだと思うんだけど、いきなり最後までは、まだ無理だろうから、キスだけでもしたいんだ。」

言いながら僕は、自分が言っていることが、年端もいかない女の子に、言う台詞ではないことに気づいていた。
でも、正直な気持ちでもあった。

アリスとしたい。
この欲望を吐き出したい。

「うん、わかるけど・・・ちょっとだけ待って。やっぱり心の準備がいるの。」

『心の準備』か、それはそうだろう。
いくら好きでも、やっぱり大人の男とそういうことを、するのだから当然な気持ちだ。

「わかった。じゃあ、そろそろ上がろうか。」
「うん、ごめんね。でも、俊ちゃんを好きなことは、ほんとだよ。」

「わかってるよ。アリス、大好きだよ。」

そういって精一杯、僕は強がって、アリスのおでこにキスをした。
アリスは可愛らしく目を閉じて、そのおでこのキスを受けた。

風呂から上がり、寝支度を整え、ベッドで待っていると昨日と同じパジャマ姿のアリスが入ってきた。

「一緒に寝てもいい？また、キスしたくなっちゃう？」

ちょっと警戒している様子だ。

「大丈夫だよ。無理やりする気はないから、安心しておいで。」
そう言うとアリスはホッとした表情で、すぐにベッドの中に滑り込んできた。
「俊ちゃん。また抱っこしてくれる？」
「あぁ、いいよ。」
そう言って、昨日同様、腕枕をしてアリスを抱え込んだ。
「俊ちゃんってあったかい。こうしてるとホッとする。」
「俺もアリスのぬくもりを感じるとホッとするよ。」
正直ホッとすると同時に『抱きたい』という感情も湧いてくる。
「俊ちゃん、したい？」
「え？いいの？」
アリスは覚悟を決めたのか、僕の体にぎゅっとしがみついてきた。
「電気、消して。」
「うん。」
そういって部屋の電気を暗くした。
「その小さい電気も消して。」
枕元のマメ電球も、消すように言われてすぐに消した。
「俊ちゃん。恥ずかしいから自分で脱ぐね。」

そう言うと、アリスは一旦ベッドから出て、パジャマを脱ぎだしたようだった。
ようだった、というのは部屋が真っ暗で、全く光がないため、何も見えなかった。

「恥ずかしいから、俊ちゃん目を閉じて。」

言われるままに目を閉じた。
目を開けていても何も見えないので、一緒なのだが。

そうして目を閉じた瞬間から急に記憶を失った。
ただ、下半身に熱い感覚が走り、一気に放出した快感を伴って、気づいたときには、アリスが僕の腕の中でスヤスヤと眠っていた。

もちろんパジャマも着たままだった。
何があったのか僕には理解できなかった。

僕はアリスとしたのか？
確かに性欲は失われていた。

それどころか、エッチした後の開放感も感じられた。
確かにアリスとしたようだった。

そうこう考えているうちに、強い眠気に襲われて再び記憶を失った。

第五話：リビドー

「朝だよ～、ご飯出来てまちゅよ～！」
アリスの元気な声で、再び目覚めたのは、やはり朝の七時だった。
今日の朝食は、和食で、納豆やアジの開きまで用意されていた。
「わぁ、朝から豪勢だね。うん、美味しいよ。」
「わぁい、喜んでくれてうれしい！」
また、アリスは、朝食を先に済ませたといって僕の食事をしている姿をニコニコしながら眺めている。
「ねぇ、今夜は一緒にご飯食べようよ。いつも食事は僕だけで、アリスは見ているだけって言うのもなんだか味気ないからさ。」
「え？うん、そうだね。じゃあ、なに食べたい？」
そう聞いたアリスは、心なしか元気がないように思えた。
「うん、じゃあ、イタリアンがいいかな。」
「うん、イタリアンね。わかった。用意しておくね。」
「うん、一緒に食べようね。」
「うん、一緒にね。じゃあ、支度して。遅刻しちゃうぞ。」
そう言われて、時計を見ると八時近くになっていた。
急いで身支度を整えて部屋を出た。

「いってらっしゃい。」

そう言ってアリスは、またほっぺにキスをしてくれたが、送り出す顔はどことなくいつもの元気なアリスの顔ではなかった。

外へ出ると天気は少し曇っていた。

会社への道のり、アリスの沈んだ顔が思い出された。

同時に、夕べの出来事も頭をよぎった。

僕は本当にアリスとしたんだろうか？

そんなことを考えていると、いきなり背中を誰かに叩かれた。

驚いて振り返ると、そこには笑顔の真由美が立っていた。

「おはようございます。安藤さん！」

「あ、おはよう。どうしてここに？」

ここは、駅からは反対の方向なので、電車で来る真由美は、駅から直接オフィスのあるビルに向うはずなのだが。

「ちょっと早めに来て銀行に寄ったんです。明日お休みでちょっと出かけるので資金調達しにきたんです。」

なるほど、確かに僕の通り道に銀行があるので、そこに寄ったから、ここにいたのだと理解できた。

「安藤さん、いつもこの道を徒歩で通勤ですよね？うらやましいな。」

一緒に肩を並べながら歩き出した、真由美が言った。

「まぁね。もう、通勤で何時間も電車に揺られるのは、嫌だったからね。通勤は徒歩圏でって思ってね。」

「ですよねー。私は三十分くらいだから我慢できますけど、男の人は転勤して、通勤圏なら二時間くらい電車で通いますしね。ほら、あのセクハラ課長だって郊外に家建てたもんだから、通勤は、二時間くらいかかるらしいですよ。そのストレスでセクハラしてるのかもしれませんよねー。」

通勤のストレスでセクハラか。ちょっと笑えた。

「じゃあ、痴漢とかも、してるかもね。」

「きゃはは、ありえるぅ〜。あの課長なら可能性大ですよね〜。」

そう言って真由美は、ケラケラと笑い出した。

明るい彼女の笑い顔が可愛らしかった。

おしゃべりをしているうちに、オフィスのあるビルに着いて、一緒にエレベータに乗って、

ドアを閉めようとしたときに、うわさをしていた課長が乗り込んできた。

「お！おはよう。おそろいか？まさか一緒の場所からご通勤じゃないだろうな？」

朝からの毒舌に、二人して顔を見合わせた。

さすがに課長も、言い過ぎたと思ったのか、咳払いを一つして黙り込んでしまった。

後ろに立っていた二人で、再び顔を見合わせ、お互い朝、話をしていたことを思い出し、
吹き出しそうになるのをこらえながら、エレベータが着くのを待った。

席に着くと、昨日の企画書が、課長から返ってきていて、いくつか赤が入れられていたが概ねこの案でいくように指示されていた。
早速、その企画の続きに取り掛かった。

昼休みも仕事をしていて、食事に出かけようと思った時には一時を回っていた。
食事に出ようと支度していると真由美が声を掛けてきた。

「安藤さん、今からお昼ですか？私も今日はお昼当番で、今からなんですけど、ご一緒しません？」
「え？いいけど、他の女子は？」

「あ、恵子さんは、なんか買い物があるからって、芳江さんはダイエット中とかで、私一人なんです。だめですか？」

そう言うと、真由美は少し沈んだような顔をした。
その顔が、妙に愛らしかったのでついＯＫしてしまった。

「わぁい、じゃあ、支度してきます。ちょっとだけ待ってってください。」

そういうと自席に戻ってバッグを取りにいった。
その姿を追っていると、同僚の恵子や芳江がガッツポーズを取っているのが見えた。

まんまと策に乗ったらしい。

「安藤さん、何食べます？あ！そうだ近所にイタメシの美味しいとこ見つけたんです。えっと・・・まだランチやってますよ。行ってみません？」

「イタメシ？あぁ、いいよ。」

「そうですか！じゃあ、いきましょう！」

嬉しそうに道案内する真由美だったが、内心こちらは今夜の食事がイタメシなのを思い出してちょっと困った。

店に着くと、昼時を少し過ぎていたのですぐに席に案内された。

「よかったぁ、いつもなら、お昼は結構人気でなかなかは入れなかったんですよ。」

「そうなんだ。そんなに評判な店なんだね。」

「えぇ、そうみたいです。だから行ってみたかったんです。安藤さんと来れたのはラッキーでした。」

『安藤さんとこれたのは？』

その言葉がまた意味深だった。

注文を済ますと、真由美が急に真顔（まがお）になって聞いてきた。

「安藤さん？あのぅ、ちょっと言いづらいことかもしれないんで、嫌だったら答えなくてもいいですから・・・。」

「ん？なんだい？」

「えっと・・・安藤さん、離婚されてもう、五年くらいになるんですよね？」

いきなりの質問で、ちょっと驚いたが、平静を装って答えた。

「あ、うん。そうだね。丸五年を過ぎたかな。」

「・・・もう、結婚する気ないですか？」

「え？結婚？ん～、どうかな。する気がないわけじゃないけど。もう、四十も過ぎちゃったし、バツイチだしね。なかなかそういうチャンスはないからね。」

「じゃあ、チャンスがあれば結婚も考えるってことですか？」

「え？うん、そりゃいいコがいればね。でも、残念ながらそういう出会いは今のところないから。」

そういいながら、頭にはアリスの顔が浮かんでいた。

「じゃあ、出会いがあれば結婚も考えるんですよね？」

「うん。まぁ、出会いがあればね。」

「よかったぁ・・・。」

「え？」

「あ、なんでもないです。で、今のところ、そういう出会いはないんですよね？」

「ん？言った通りさ。なかなか働いていると行動範囲が狭まるしね。それに俺は別に他に趣味があるわけでもないから、交友関係も広くないし・・・なかなか、出会いはないね。」

「そうですか・・・あと、年齢差とか気にします？」
「え？年齢差？」
「はい、安藤さんは４０歳でしょ。結婚するなら同じくらいの年の人がいいとか、もっと若いコでもいいとか。」
「ん～別に年は関係ないかな。むしろ若いコなら光栄だよ。そういうコが俺に惚れてくれるとは思えないけど。」

そう言いながら、再びアリスの顔を思い浮かべた。

「ほんとですか？！じゃあ、年齢は関係ないってことですか？」
「あぁ、関係ないかな。一番はお互いの気持ちが合うことかな。」
「ですよね。やっぱり恋愛も結婚も気持ちが大事ですよね。」
「そうそう、一緒にいてホッとできる相手なら、年齢とか容姿とかは関係ないね。好きならそれでいいんじゃないかな。」

「容姿もですか？ちなみに安藤さんはどんなタイプの女性が好みですか？」
「タイプねぇ、まぁこの年だから何人かお付き合いさせてもらったけど、これっていう決まったタイプはないかな。やっぱり気持ちが優先で、惚れた女性が好みのタイプってことが多いね。」

「惚れた人がタイプ・・・ですか？つまり、好きになった人がタイプになるってことですか？」
「そうそう、容姿でこういうのがいいっていうんじゃなくて、その時、好きになった人がタイプになるって言うのかな。」

「強いていうなら、見た目はどういう感じが好きですか？美人タイプ？それともかわいいタイプ？」

「ん～美人よりは、かわいいタイプが好きかな。なんかこう包みたくなるような感じがあるコがいいな。」

「包みたくなるような・・・それって小さいコがいいってことですか？」

「そうね。自分よりは小さいコがいいかな。」

「じゃあ、私みたいに背が低くてもいいですか？」

「あーそれは全然いいよ。むしろ背は低いコの方が好きだな。」

「ほんとですか？！」

そう言った真由美の顔がパッと明るくなった。

僕も鈍感ではないから、真由美が僕に好意を持ってくれて、根掘り葉掘り聞いてくれているのを理解していた。

「あのぅ、こんなお昼に何なんですが、私・・・。」

「お待たせいたしました。ボロネーゼはどちらですか？」

店員の声が真由美の声を遮(さえぎ)った。

「あ、こっちね。」

そう言って、応えて真由美を見ると、明らかに店員に対して不満気な顔を向けていた。

「わぁ、うまそうだな。やっぱり人気の店なんだね。」

「そうですか？別に普通な感じです。」

ちょっと拗ねた感じで、応えた真由美の態度が妙におかしかったが、平静を装って食事を始めた。
その後は、タイミングを逸したのか、会社の話やまた、セクハラ課長の話で終始した。

オフィスへ帰る途中、真由美が言い出した。

「安藤さん、今度は夜誘ってもいいですか？」
「え？あぁ、仕事が片付いていたらね。」

「ほんとに？じゃあ、私も手伝いますから。」
「あぁ、ありがとう。なんか君といると元気出るね。」

「ほんとですかぁ！うれしい！今度絶対誘いますから、店も探しておきますから！」

はしゃいでいる真由美の姿が可愛らしかったが、その姿を見ながらも僕の心にはアリスが浮かんでいた。

仕事を終えて、また『有巣倶楽部』へ向った。
いつものように、老人に案内されて部屋に戻ると、三つ指を突いたアリスがお出迎えをしてくれた。

「お帰りなさいませ。」

アリスのいつもの笑顔に癒されている自分を感じた。
しかし、今日の食事はイタリアンだったため、昼のパスタが少々効いていて、いつもほど食が進まなかった。

「どうしたの？俊ちゃん具合悪い？」
「ん？そんなことないよ。ただ、ちょっと食欲がないだけだよ。」
そう言いながらも、昼にイタメシを食べたことを言えず、アリスに済まない気持ちになった。
「そうなんだ。なんか薬とか飲む？」
「いや、大丈夫だよ。食事は美味しいんだけど、少しだけ胃がもたれていてね。それより、今日は一緒に食事するって言ったけどアリス全然食べないね。」
「・・・ごめんなさい。実は、待っていて、あまりおなかがすいちゃったんで先に食べちゃった。」
「そうなんだ？ごめんね。仕事が遅くなっちゃったからね。明日はもう少し早く帰るから、今度は一緒に食べようね。」
「うん。今度は我慢するね。」
そう言いながら、すまなそうな顔をしているアリスが愛おしかった。
本当は食欲があまりなかったが、無理をしてでも食事を胃の中に押し込んだ。
「わぁ、結局全部食べてくれたんだ。嬉しい！ありがとう俊ちゃん。」
「いや、無理したわけじゃないよ。食べてるうちに美味しくて食欲が出てきたから食べただけだよ。」
「優しいね。俊ちゃんって。だから大好き！」

そう言ってまた抱きついてきたアリスを、受け止めるとふんわりとやわらかな香りが鼻腔をくすぐり、その刺激がまた下半身まで届いた。

「アリス・・・。」

ぎゅっと抱きしめてそのまま唇を奪おうとしたが、アリスは抱きついたまま顔を僕の胸にうずめて動かなかった。

しばらくしてアリスは、パッと起き上がるとお風呂の支度をしてくると言って、廊下を駆けていってしまった。

どうしてアリスはハグ以外の行為を拒むのか。

やはり恥ずかしいのか、それとも本当は俺のことなど好きなわけではなく、仕事だから仕方なく相手をしているのか。

よく、キャバ嬢が客のご機嫌を取るために、思わせぶりな行為をして、でも、結局は何もさせてもらえず、

金だけ巻き上げられたという話を聞くが、実はここもそういうものなのか。

しかし、金の請求は一切ないし、むしろ服も貸してくれたり、食事も出してくれたり、至れり尽くせりしてくれる。

しかも泊りまでできる。

感覚は、はっきりしていないが性行為もさせてもらえた。

やっぱり僕の思い過ごしだろう。

アリスは、ただ明るいと恥ずかしいというだけなのかもしれない。

「お風呂用意できたよ～。」

アリスの明るい声が奥から響いてきた。

「はーい！」

僕も子どもに還ったように応えた。

いつものように風呂に入ると程なくアリスが入ってきた。

今日はなんとビキニだ。

それもいわゆるヒモビキニで少しゆるい感じもして、隙間から大事な部分が見えそうだったので余計に興奮してしまった。

しかし、アリスはそんな気持ちを知ってか知らずか、いつものように身体を洗ってくれて一緒に湯船に入ってその後は先に上がってしまった。

俺の股間は、明らかに脈を打つくらいに反りあがっていたのに、その現象には目もくれなかった。

普通のイマドキのコなら性知識も豊富だし、小中学生でも援交をするくらいだからアリスだって、それがどういう意味かぐらいは知っているはずだし、興味があるはずだ。

なのに身体は摺り寄せてきても、それ以上の行為は決してさせない。

明らかに変だ。

夕べも本当は何もしていないんじゃないか？

僕はそういう疑いを持ち始めた。

風呂から上がって一休みして寝支度を整えて、またベッドに入っているとアリスが寝室に入ってきた。

今日は、可愛らしいネグリジェを着てきた。

ふわりとしたネグリジェの裾からはスラリとした真っ白なアリスの足が見えている。
再び興奮を覚えた僕は、今日こそアリスと実感を伴って一つになりたい、と思い期待を膨らませた。

布団に入り込んできたアリスは、今日もあかりを消すように懇願してきたが、僕はそれを拒んだ。

「恥ずかしいよう。やっぱ、あかりは消して。」

再び哀願してきたアリスだったが、今日はアリスの姿を見ながらしたいと思ったので再び拒んだ。

するとアリスは泣き出した。

「何も泣くことはないじゃないか。本当に好きだからアリスを見たいんだよ。」
「うん、わかってる。でもね。わたしやっぱり子どもだから、恥ずかしくて、見られてると思うと、それだけで体がいうことを利かなくなるの。」

「体がいうことをきかない？」
「うん、つまり・・・俊ちゃんのを受け入れられなくなるっていうか。」

「濡れないってこと？」
「そう・・・。」

そう言って、アリスは僕の胸に顔を埋めて恥ずかしがった。

「大丈夫だよ。ゆっくりするから、アリスにも感じて欲しいから。」
「でもね。だめなの。やっぱりできないの。だから、あかりだけは消してほしいの。」

これほど頑固に頼まれると、僕も嫌われたくはないので、さすがに折れないわけにはいかなかった。

「わかった。じゃあ、消すよ。」
そう言って、部屋を真っ暗にした。

「目をつぶって。」
「大丈夫、つぶらなくても暗いから何も見えないよ。」

「最初だけ、ね、お願い。」
「わかったよ。」

そういって、目をつぶると一瞬で昨日と同じ感覚が身体を襲ってきた。
宙に浮いているような、それでいて奈落の底に突き落とされているような感覚が、全身を包んで、あっという間に果ててしまった。

そして、気がついて傍らを見ると、また、アリスがスヤスヤと寝息を立てて眠っていた。
それを確認したかしないかのうちに、僕も強烈な睡魔(すいま)に襲われて、深い眠りについてしまった。

第六話：裏切り

次の朝も、同じようにアリスの声で目覚めると、同じようにアリスに見守られながら、独りで朝食を済まして会社に出かけた。

歩きながら、夕べの出来事や、なぜあれほど言ってもアリスは一緒に食事を採ってくれないのか、など、様々な疑問や疑念が頭の中を過ぎった。

会社に着くと真由美が、いつものように明るい笑顔で迎えてくれた。

「おはようございます。なんか今日は、少しだけ疲れてますね。」

「え？そうかな？」

なかなか勘がするどい。

アリスとの生活に、ちょっと疲れを覚えた僕の気持ちを、すぐに見抜かれた。

「あ、昨日約束した食事の件ですけど、明日はだめですか？」

「ん？明日。あー大丈夫だと思うよ。」

「ほんとですかぁ！よかった！じゃあ、店押さえておきますね。約束ですよ。」

そう言って、真由美は嬉しそうに自席にも戻ると、同僚の女子になにやら報告しているようだった。

今日も仕事を終えて『有巣倶楽部』に向おうと思ったが、ちょっと家を空けていたので、気になって部屋の様子を見に行った。

案の定、新聞受けに溜まった新聞がはみ出ていて、明らかに留守とわかるようになっていたので、

防犯上まずいと思い、新聞を取り出した。

郵便受けにも、それなりに手紙やらチラシやらが溜まっていたのでそれも取り出した。

部屋に入り手紙をチェックしていると、突然電話が鳴った。

「もしもし？」

「おう、俊介か、どうだ元気にしてるか？」

親父の声だった。

「どうした？こんな時間に？」

「ん？いや、たいしたことではないんだが、お母さんがな・・・ちょっと入院してな。」

「え？お袋が？なんで？悪いのか？」

「いや、もう手術も終わった。大丈夫だ。その・・・癌とかではないから。ただ胸にしこりが出来て乳腺症とか言ってたな。でも、もう大丈夫だ。一週間くらいで退院できるそうだから心配はいらない。」

「何でもっと早く言わなかったんだよ。」

「いや、母さんがな、おまえに心配掛けたくないから知らせるなと

言ったんだ。」

「ったく・・・で、どこの病院なんだ。」

「ん？あー、見舞いならいいぞ。母さんも弱ってる姿は見られたくないようだから。」

「だからって見舞いくらいいかせろよ。」

「ん・・・やっぱり遠慮してくれ。おまえも忙しいだろうし、土日は面会できないんだ。」

「なんで？身内でもか？」

「ん・・・そうらしい。病院の規定で、付き添い以外の見舞いはできないらしい。」

言い訳がましい親父の嘘をわかりつつも、これ以上言い争っても仕方ないと思い、こちらが引いた。

「あぁ、わかったよ。じゃあ、退院したら連絡をくれよな。家には行くから。」

「わかった。じゃあ、俊介も身体を大事にな。」

「あぁ、親父も無理すんなよ。自分が倒れたら洒落（しゃれ）にならないから。」

「あはははは、まだまだ、体力には自信があるから大丈夫だ。」

「そうか・・・じゃあ、また。」

そういって電話を切ってから、ものすごくへこんだ。

離婚以来、実家には足が遠のいて、電話すら数ヶ月に一度しかし

ていなかったので、いまさら親子として見舞いになど、行ける立場ではないが、やはり寂しかった。

むしゃくしゃする気持ちを抑えながら『有巣倶楽部』に向った。

「おかえりなさーい。」

眩しいくらいの笑顔で、アリスは僕を出迎えてくれた。

その笑顔ですべてのもやもやが癒された。

「お疲れさまぁ、今日はどうする？お食事先？それともお風呂入る？」

「アリス・・・。」

そういって僕は、アリスをギュッと抱きしめた。

アリスが持ってくれていた鞄が落ちた。

「俊ちゃん・・・。」

そういうとアリスは、何も聞かずに身体の力を抜いて俺に身を委ねてくれた。

2、3分そのままアリスを抱きしめていたが、そっと身体を引き離すと、アリスは目に涙をいっぱい浮かべていた。

驚いて見つめていると、アリスは、

「大丈夫だよ。あたしは俊ちゃんの傍にいるから。」

そう一言だけつぶやいた。

そして、涙を拭うと、さっきの笑顔に戻って、
「さ、どうする？ご飯食べる？おなかすいたよね。」
と、優しく言葉をかけてくれた。

食事を済まし、いつものように風呂に入り、アリスに身体を洗ってもらい、寝室に向った。
そして、いつものようにアリスは、恥ずかしそうに“添い寝”をしてくれて、僕の胸の中で、スヤスヤと寝息を立て始めた。
「アリス・・・。」

今本当に、僕の気持ちをわかってくれるのは、アリスしかいない。
そう、アリスはこんなに幼いのに、僕のことや、僕が感じている切ない気持ちや、苦しい気持ちをすべて受け止めてくれて、
ただただ、“癒し”を与えてくれる。

もう、それは言葉では言い表せない、何か大きな海のような、水の中で優しく包まれているような感覚を僕に与えてくれる。
僕は、いつの間にか、アリス無しでは生きられなくなっていた。

「おはよう！朝だよ～。」
いつもの子どものままのアリスの声が、寝室に響き目を覚ました僕はゆっくりと起き上がった。
でも、そのけたたましいほどの声も、僕には、もうなくてはなら

ない音になっていた。

「おはよう。今日の朝食はなんだい？」

「きょうはねぇ、プレーンのオムレツにハムでしょ。サラダにヨーグルトだよ。ブルベーリーソースのね。」

「おぉ、今日もホテルのようなごちそうだな。じゃあ、支度したらいくよ。」

「はーい、早く来てね。待ってるね。」

そういうとアリスは小走りに部屋を出て行った。

こんなに癒されて、なに不自由ない生活を送って、しかも無料(ただ)で。本当にいいのだろうか。

でも、その頃から、この『有巣倶楽部』での生活ではなく、アリスと二人で家を借りてちゃんと生活をしたいと思い始めていた。

生活自体は何の不満もなかったが、やはり「有巣倶楽部」という仮の生活空間であることに違和感を覚えていた。

できれば、あの店長なのだろうか、初老の男と話をつけて、アリスを「身請(みう)け」したいと考えていた。

朝食を済ませ、出勤の支度をして、いつものほっぺにチューで、送り出してもらって、会社に向った。

「おはようございます。今日は紺のスーツよくお似合いですね。ワイシャツもいつもパリッとしてて、安藤さんはおしゃれですね。」

また、いつものように真由美が声を掛けてくれた。
やっぱり好意をもたれているのは、あからさまにわかる。
「ありがとう。木村君もいつも私服はかわいいよね。センスもいいし。」
「ほんとですか？！嬉しい！安藤さん、初めて褒めてくれましたね。」
「そうだったかな。でも、お世辞じゃないよ。センスの良さは前から思ってたしね。」
「わぁ、なんか今日は一日頑張れそう！そうそう、今夜大丈夫ですよね？」
「え？あぁ、今夜ね。大丈夫だよ。仕事早めに終わらせるから。」
「わぁい、じゃあ私もがんばります！なんかお手伝いすることがあったら遠慮なく言ってくださいね。」
「うん、ありがとう。助かるよ。」
「はい、じゃあ、今夜楽しみにしてますね。」
そういうと真由美は、また自席に戻って同僚たちになにやら報告している様子だった。
この歳でオフィスラブのネタにされるとは、思ってもみなかったが、気分は悪くはなかった。
思ったよりも仕事が片付いて、真由美との約束の時間に少し間があるくらいに終えることができた。

真由美は、僕より三十分ほど早く仕事を終えて、『先に行きます。』と耳打ちして社を後にした。

帰り支度をして、外に出ると陽気はすっかり春になっていて、そよ風がやさしく頬を撫でていった。

「安藤さん！お待ちしてました。お仕事大丈夫でしたか？」

後ろから真由美に声を掛けられて、少し驚いた。

「あぁ、ここでずっと待っていてくれたの？」

「いえ、ちょっと買い物があったんで、今来たら安藤さんがオフィスから出てくるの見えて、急いで追いかけてきたんです。」

確かに心なしか息が荒かった。

「じゃあ、いきましょうか。お店、予約したんで案内しますね。」

そういうと真由美は、僕の腕に手を回して、腕を組んできた。

ちょっと驚いたが、まぁ悪くはないシチュエーションなので、そのまま彼女のペースに委ねることにした。

「ここです。来たことありますか？」

そう言われて周りを見回したが、以前は違う店があった気がするが、この店は初めてだったので、

「初めてだと思うよ。」

と、言うと、

「よかったぁ、安藤さんおしゃれだから知ってるかと思って。」

と　言って胸をなでおろしていた。

“おしゃれ”か・・・、決しておしゃれなのではなく、このところアリスの言われるままに、服を着ているだけだったので密かに苦笑いをした。

店に入ると落ち着いた感じで、調度品はヨーロッパからの取り寄せのようなものが多く、フランス料理系の店であることを察した。

「どうですか、ちょっといい雰囲気のお店でしょ？」

「あぁ、こんなところにこんな店があったなんて知らなかったよ。」

「でしょ～、今日は私がエスコートしますから、安藤さんはついてきてくださいね。」

そう言って、いたずらっぽく笑う真由美がとても可愛らしく感じた。

席について、注文を彼女に任せると、しばらくしてソムリエがワインを運んできた。

「あ、テイスティングは安藤さんお願いします。」

そう言われて、グラスを取りテイストしてＯＫを出すと、

「さすが、素敵です。大人ですよね。安藤さん！」

いたく感動している真由美を尻目に、今時なら大学生でも、ワインのテイスティングの作法くらい知ってるはずなのだが、と考えてしまった。

その後、前菜から、しっかりとコース料理が出て、最後のデザートまでの間、ゆったりと真由美との時間を楽しめた。

「安藤さん、これ。」
コーヒーを飲んでいると、真由美は、そう言って、小さな手提げ袋を渡してくれた。

「ん？なにこれ？」
「開けてみてください。」
そう言われて、中をみると明らかにネクタイとわかる包装がされていた。

しかし、その指摘はせずに、最後まで包みを開けてみると思ったとおりネクタイが出てきた。

「これは？どういうこと？」
「安藤さん、まさか忘れてるんですか？自分の誕生日？」

「え？あぁ、今日は・・・、そうか、誕生日か。」
「やだぁ、本当に忘れてたんですか、ご自分の誕生日なのに。毎日働きすぎですよ。少しは身体も気持ちも労わってください。」

「あぁ、じゃあ、これは誕生日プレゼントかい？」
真由美が、にっこりと笑顔でうなずく。

「あ、どうですか柄、気に入りませんか？」
「いや、いいセンスしてるよ。ほんとに、ありがとう。気に入ったよ。早速付けてみようか。」

「ほんとですか？つけて、つけて！嬉しい、あ、そっち持ちます。」

そう言うと、真由美は、外したネクタイを、無造作に丸めてプレゼントの入っていた紙袋に押し込んだ。

「わぁ、やっぱ似合います。素敵です。あ、自分で褒めてるみたいですけど、選んだとき、安藤さんの顔を思い浮かべて一生懸命選んだんですよ。」

「ありがとう。ここじゃつけてる自分を見れないけど、似合ってるなら、よかったよ。嬉しいよ本当に。」

「あ、ちょっと待ってください。」

そう言うと、真由美は、バッグからコンパクトを取り出し、鏡を僕に向けた。

覗くように、鏡に自分の姿を映して、ネクタイを見てみると本当によく似合っていた。

「おぉ、本当に似合ってるね。今日のシャツとスーツにピッタリだ。」

「ですよね。よかったぁ、喜んでももらえて、私幸せです。」

幸せと言われて、ちょっと戸惑ったが、ここまではっきりと意思表示をされているのだから、ちゃんと喜ばないと申し訳ないと思った。

デザートを終えて、支払いをしようとすると

「あ、だめです。今日はお誕生パーティなんですから、あたしが持ちます。」

「いや、そこまでは・・・それに結構するだろう、このコースは。ワインも一本空けたし。」

「いいんです。あたしにさせてください。」
強引な真由美の願いに、これ以上言っても返って申し訳ないと思って身を引いた。

支払いを済まし、店を出るともう１１時近くになっていた。

「じゃあ、今日はありがとう。大事にするよ、このネクタイ。」
そう言って別れようとすると、真由美は急に俯(うつむ)いて黙ってしまった。

様子を伺っていると

「あのぉ、安藤さん・・・。」
「ん？どうした？気分でも悪いのか？酔ったかな。君の方が多く飲んでたしな。」

「違うんです。安藤さん、今夜・・・一緒にいてくれませんか？」
耳を疑った。

“一緒にいる”ということは、男と女である以上、思い浮かぶシチュエーションは一つだった。
そう言ったきり真由美は、俯いたまま動かなくなってしまった。

どうしたものか一瞬悩んだが、こんな道の真ん中で、男と女が動かなかったら、周りもおかしいと思うだろう。
案の定すれ違うカップルがこちらを気にしてみていた。

「わかった。いいんだね。」
そういうと真由美はこっくりと頷いた。

真由美の肩をそっと抱き寄せると、そのまま力が抜けたように、しなだれかかって、すべてを僕に委ねてきている気持ちを感じた。

ラブホなんて何年ぶりだろう。
妻と交際していた時以来だから、本当に十年ぶりくらいかもしれない。

その頃とシステムに、さほど変わりはなかったが、
部屋に入ってみると昔のような変なきらびやかさはなく、割と小奇麗でシンプルな感じだった。

ソファに腰掛けると、真由美に断ってタバコを一本吸わせてもらった。
さすがに落ち着かなかった。

そうしていると真由美が

「あたし、先にお風呂に入ってきていいですか？」

と尋ねてきた。

「あぁ、いいよ。俺はあとでいいから。」
そう返事をすると、洗面所のほうに、スタスタと真由美は向っていった。

タバコの先から流れる紫煙（しえん）を見つめながら、
今自分がしていることが、本当によいことなのだろうかと自問自答していた。

正直、女性からあそこまで言われて、しかも真由美のような可愛らしいコが、あそこまで意を決して誘ってきたのだから、
これに応えないのはかえって失礼だし、などとあれこれと言い訳がましく考えていたが、本当のところはアリスのことが一番気になっていた。

この分だと、もちろん今夜はアリスのところには行けない。

もっとも、今日は食事をしてくるとあらかじめ言ってあるし、仕事も忙しいことは言っているので、
行かなくても支障はないが、本音を言えばアリスとの時間を削りたくはなかった。

それほど今の僕にとっては、アリスの存在が大きく占めていることを、再確認することになった。

「お待たせしました。お先です。」

バスタオルに身を包んだ真由美が現れ、そのタオルから突き出た白い肌が、
さっきまで色々考えていたことをすべて吹き飛ばした。

急いでシャワーを浴び終え、部屋に戻ると薄暗くなっていて、真由美はすでにベッドの中に入っていた。
そっとベッドにもぐりこみ、そのままの勢いで真由美にキスをした。

そうして、一旦真由美と見つめあい、もう一度だけ意思を確かめた。

「本当にいいのかい？」

こっくりと頷き、真由美はその愛らしく大きな瞳を閉じた。

ここまで覚悟されれば、あとはそれに応えるのが男の礼儀だ。

などと自分勝手な考えに納得して、真由美の体に覆いかぶさった。

薄暗い光の中でも真由美の白く柔らかい肌は、僕の手のひらに吸い付いてきた。

全身をくまなく愛撫していくと、最初は固かった真由美の体も徐々にほぐれてきて、いつしか僕を受け入れるために身体を開いてきていた。

真由美の最も敏感なところは、すっかり溢れ出してきて、そっと触れると嗚咽（おえつ）とも取れる声で僕の行為に応えていた。

充分にほぐれたところで試みようとしたが、逆に僕の方がいうことをきかなかった。

少し焦っていると、その事態に気づいた真由美は逆に僕に覆いかぶさってきて、唇から徐々にキスの位置を下に向けてきた。

動きこそぎこちなかったが、とても愛情を感じた僕は、その思いに身体も応えるようになってきていた。

そして、今度は真由美が僕の一番感じる部分を握るとゆっくりと動かし始め、

ついにはその愛らしい唇を這わせ、そっと唇の奥深くまで、僕のものを受け入れた。

少し歯が当たって痛みを感じたが、しっかりと僕のものは固さを増して臨戦態勢に入った。

真由美の身体を反転させると、今度はお返しに僕の唇で真由美のあふれ出ている蜜を掬(すく)っていくと、狂おしいまでの声を上げて真由美は反応した。

いよいよとなったが、さすがに避妊をしないのはまずいと思い、ベットの宮においてあるコンドームを取り出し、

つけようとしたが、これ自体がすごく久しぶりの行為なので戸惑ってしまった。

その間、真由美は目を閉じてジッと待っていてくれたが、慣れた女ならここで興ざめとばかりに軽蔑のまなざしを向けただろう。

やっと準備が整って、真由美と体を密着させて、その部分に僕の塊をあてがった。

真由美の体がピクッと反応して、一瞬身体を硬直させたが、僕が「力を抜いて」と優しく耳元で囁くと、

スッと力を抜いてきたので、その瞬間に一気に真由美の中にもぐりこんだ。

「あぁ！」

大きな声で、真由美が反応し、その声に釣られるように僕も体に勢いをつけて動かした。

僕のスライドに合わせて、真由美はその可愛らしい声を漏らし、徐々に上り詰めていっている様子が伺えた。

僕もアリスとそういう行為をしているはずだったが、実感として感じるのは本当に久しぶりだった。

真由美が上り詰める前に、果てそうになったが、なんとか持ちこたえていた。

そして、ついに真由美の体がピンッと硬直し反り返ってきたので、僕もより深く真由美の中に塊を沈ませていくと、
その瞬間
「あぁぁぁ！いっちゃう！」
と、真由美は叫んで、身体をベッドから落ちそうなくらい仰け反らせた。
同時に、僕の塊から大量の樹液を吐き出し、真由美の中でピクピクとして果てた。
グッタリとした二人は、そのままジッとして抱き合っていた。
そして、我に帰った僕は真由美の唇や頬や目に優しくキスをした。
真由美は少し涙ぐんでいて、僕の体をギュッと抱きしめると
「うれしい。俊介さん、って呼んでいいですか？」
と聞いてきた。
「あぁ、いいよ。真由美。」
そういうと、さらに腕に力を込めて僕の体を抱きしめてきた。
僕らはまだ繋がったままだった。
翌朝は、そのホテルから一緒に出勤したが、真由美は、昨日と同

じ服装だから、
『まだ誰も来ないうちに着替える。』と言って、先に会社に向った。
僕は、しばらく喫茶店でモーニングを食べて時間をつぶすと、そのまま会社に向った。
「おはようございます！」
いつもの明るい真由美がそこにいた。
ちょっと顔を赤らめてはいたが、元気ハツラツな態度は、いつもと変わらず挨拶を済ますと、同僚のところでキャッキャと話を始めた。
やはり、女という生物には計り知れない未知の部分がある。

第七話：報復

仕事を終えて、社を出たのは九時を回っていた。

昨日のツケが、今日の仕事に回っていたため、仕方なかったが、今日はその足で「有巣倶楽部」に向かった。

「おかえりなさい・・・。」

いつもと違うトーンでアリスは僕の顔も見ずに声をかけてきた。

「ん？どうした？何かあった？」

僕が聞くと、アリスは俯(うつむ)いたまま何も応えない。

「どうしたの？アリス、具合でも悪いのか？」

そう言って、おでこの熱を計ろうと手を伸ばすと、その手を勢いよく払われた。

「なんだ、アリス、夕べ来なかったから怒ってるのか？」

僕が少しからかって言うと、顔を上げてキッと僕を睨んだ。

その睨んだ目には涙がいっぱい溜まっていた。

「俊ちゃんひどい！夕べは俊ちゃんの誕生日でしょ。そう思って色々用意して、ずっと待ってたのに。俊ちゃんを驚かそうといっぱい準備したのに・・・。」

そういうと、大声で泣き出した。

リビングに行くと部屋には大きく

《俊ちゃん！誕生日おめでとう！！》

の模造紙が張られていて、昔幼稚園や小学校の誕生日会で飾り付けていたような、折り紙を切って輪にして繋いだ鎖とか、色のついたティッシュのような素材の、薄い紙でつくった花びらとかが、めいっぱい飾られていた。

「アリス・・・。」

僕は泣き喚いているアリスが本当に愛おしくなって、荷物を放り出してアリスの身体をギュッと抱きしめて、体中をさすって、ごめん、ごめんと何十回と謝った。

謝っているうちに僕も、涙が出てきて、アリスの思いに対して、心から悪いと感じた。

泣き疲れたアリスは、そのまま僕の腕の中で眠ってしまった。

まだ、その愛らしい目元に一筋の涙が残っていた。

「おっはよう！」

アリスの大声で、たたき起こされた僕は、目の前で、にっこりと微笑みながら立っているアリスの姿を見て、自分の居所が店にいることを自覚した。

「おはよう、元気になったみたいだね。よかった。」

「えへへ～、いつまでも怒っててもしょうがないもん。」

「はは、その明るさがアリスの良さだよ。ホッとする。」
「そうぉ？なんか褒められてるのかバカにされてるのかわかんないけど・・・。」

「ばかになんかしていないよ。」
「まっいっか、それにもう、ちゃんと片付けもしたし。」

「片付け？」
「ううん、なんでもない。お食事できてるよ。ちゃんと食べていってね！」

「うん、ありがとう。」
そういうとダイニングに向かい食事をした。

食事を済まし、出かける準備をして、いつものようにアリスに送り出されて出社した。

会社に着くと、何だかオフィスの雰囲気が違っていた。

いつもの朝の喧騒がなく、皆一様に押し殺したように静まり返っていた。

「どうしたんだ？」
隣に座っている同僚に、小声で話しかけた。

「知らないのか？」
その同僚は呆れたという顔で、僕の方を見返した。

その時、課長が、どこからか戻ってきて、全員が起立したので、釣られて僕も起立した。

「あー、もうすでに、ニュース等で知っているとは思うが、同僚である木村真由美さんが、不慮の事故で亡くなられた。」

「はぁ！！」

思わず大声を上げてしまった僕に、周りが驚いて視線を向けた。

「んん！」

課長は、咳払いをすると続けた。

「正直、彼女の死は、事故なのかどうか、まだ警察でも捜査中で、場合によっては、関係のあった方に任意で事情を聞きたいとの要請もある。その場合は、できるだけ協力をいただきたい。」

『いったい真由美の身に何があったんだ。』

僕の頭は、混乱していた。

「また、もしかすると、マスコミからも何らかの取材を受けるかもしれない。その場合は、絶対に取材を受けないこと。これは上からの命令なので厳守するように。以上。それでは、今日の仕事を始めてくれたまえ。」

そういうと、課長は再び席を後に、どこかへ出て行った。

皆がざわつくと突然、真由美の同僚だった女子の一人が泣き出した。

釣られて数名の女子も嗚咽を漏らし始めた。

僕はすぐに、隣の同僚に、どういうことなのか説明を求めた。
同僚は『本当に知らないのか？昨夜のほとんどのニュース番組で取沙汰されたのに。』と前置きを言った後、説明をしてくれた。
それによると、真由美は、昨日退社後、帰りの電車に飛び込んだというのだ。
それで課長が『事故なのかどうか』と言ったことに納得がいった。
つまり、自殺の可能性もあるということなのだ。
でも、当然、そんな可能性がないことを、僕が一番知っていた。
その前の晩に、少なくとも真由美からすれば『思いを遂げられて、幸せの絶頂にいた』はずなのだから。
「絶対、真由美は自殺なんかしない！」
突然同僚の泣いていた女子が叫んだ。
「だって、だって、真由美は今幸せだったはずだもの！」
そういうと僕の方へ視線を向けた。
恐らく、真由美と親しかった彼女は、僕とのことを真由美から聞いていたのだろう。
他に事情を知っている二、三人の女子がこちらを悲しそうに見ていた。

その日は、ほとんど仕事にならず、六時過ぎに退社した。

もやもやした気分を晴らそうと、今日も有巣倶楽部に向かった。

その道すがら、昨日アリスが言った言葉を、フッと思い出した。

「それにもう、ちゃんと片づけもしたし。」

僕は、一瞬歩みを止めた。

まさか・・・。

有巣倶楽部に着くと、いつものように、門番の初老の男が案内をして、自分の部屋に戻った。

「おかえりなさいませ。」

これも、いつもの通り、アリスが三つ指をついてお出迎えをしてくれた。

そして、にっこり笑った後、僕に飛びついてきて、今日の食事の説明をしだした。

食事を始めると、これもいつもの通り、アリスは、僕が食べている姿をうれしそうに覗き込んでいた。
そして、その間、たわいもない話を続けていた。

食事が終わりリビングで寛いでいる時に、それとなくアリスに聞いた。

「今日、うちの会社の同僚の女子社員が亡くなったんだよ。」
「・・・・・・。」

「明るくて、いいコだったんだけど、残念な話だよ。」
「そうなの？その人は俊ちゃんと親しかったの？」

「え？ああ、仕事では、良くしてくれたんで。」
「そう。仕事では・・・ね。」

その言い回しを聞いて、僕の背筋に悪寒が走った。

「俊ちゃん、私のこと愛してる？」
突然アリスが尋ねてきた。

「もちろん。僕にとってかけがえのない存在だよ。」
「そう・・・。ならいい。お風呂に入る？」
そういうと、振り返りざまフッと笑みをこぼしてアリスは風呂場に向かった。

第八話：幻想

翌朝、目が覚めるとすでにアリスは、食事の用意をしてリビングで待っていた。

僕が席に付くと、うれしそうにニコニコと向かいの席に座って僕の食事する様子を見ている。

いつもの風景だが、もう僕にはその“当たり前”が耐えられなくなっていた。

「ねぇ、どうして一緒に食事をとらないの？アリスと一緒に食事をしたことないよね。」

「え？私、早くに起きて食べちゃったから。」

「いつもそうだよね。アリスは『食べちゃった』っていうけど、台所を見ても食べた跡とか見たことないんだけど。」

僕は、自分が馬鹿な質問をして、アリスを責めていることを自覚していた。

昨日の真由美の死という出来事に、まだ混乱していた僕は、アリスに再び嫌な思いをさせる質問であることは重々わかっていたが、言わずにいられなかった。

昨日の出来事から、この生活の異常さに僕自身も気づき始めていた。

いや、そんなことは初めからわかっている。
異常な生活であることをわかっていて、その異常な空間が自分の居場所であることを認めていたし、そこしか居場所はないと思っていた。

でも、真由美の死という現実が、その異常さに浸っている状態を『このままではいけない』という気持ちに変えていった。

「どうして？どうしてそんなことというの？」
アリスはまた半泣きになりながら、僕を睨みつけて訴えた。

「だって、本当にアリスのことを思ってるから、一緒に食事もしたいし、お風呂にもちゃんと裸で入りたいし、それに・・・。」
「・・・・。」

「えっちだってちゃんとしたいよ。」
「・・・・。」

「でも、アリスはいつも僕をはぐらかして、自分だけのペースでことを運んで、僕に尽くしてくれているようでその実、何も僕を満足させてくれていない。」
「ひどい。なにも満足してくれていなかったんだ。作ったものをおいしいって、言ってくれたのも嘘だったんだ。」

「ちがう！嘘じゃない。作ってくれたものは美味しいし、風呂でマッサージしてくれたのも気持ちがいいし、えっちしている気分だって味わっている。でも、何か違うんだ。そこに実感がない。本当に生きている人間としての実感がないんだよ。」
「生きている実感？」

「そう、アリスに触れていても、本当は、この手に触れていないんじゃないかって。そこにアリスはいるけど、本当は幻想なんじゃないかって。」
「ゲンソウ・・・。」

僕は、アリスとの生活の矛盾を、ついにぶつけてしまった。

「そう、本当はこんな薄暗いところにいるんじゃなくて、一緒に表にも行きたい。外の世界でアリスと暮らしたい。」
「ソトノ・・・セカイ。」

「アリス！僕と、僕とここを抜け出して一緒に暮らそう！」
「クラス・・・。」

「そうだ！こんな光も届かない薄暗い空間ではなく、一緒に外の世界で暮らそうと言ってるんだ。」
「ソトノセカイ・・・クラス。」

「そう、二人でここを抜け出して幸せになろう！外へ出てもっと幸せになろうよ。ずっとこんな薄暗い部屋の中ではなく、太陽の光の下で遊んだりしたいんだよ。」
「シ・ア・ワ・セ？」

「そう、君だってまだ12歳の女の子なんだ。遊園地とか行きたくないのか？」
「ユウ・・・エンチ、ワカラナイ・・・。」

「とにかく君を助けたいんだ。普通の生活をさせてあげたいんだよ。普通の女の子の生活を。君だってここへ来る前は普通の生活をしていただろう？学校へ行ったり、友達と遊んだり。」

「ガッコウ？トモ・・・ダチ？ワカラナイ・・・・。」
「どうして？君のことを愛しているんだ・・・。」
「アイシテル・・・ワタシモ、アイシテル、シュンチャンヲ・・・・アイシテル。」
「なら、ここを出て一緒に暮らそう。外の世界で一緒にくら・・・・。」
その言葉を遮るようにアリスは伏せていた顔を上げて意思のない瞳で僕の顔を見据えてつぶやいた。
「ゴメンナサイ。アナタノ“シフク”ハ、ココマデヨ。」
その瞬間、薄暗かった部屋の隅々から、まばゆい光があふれ出し、壁の小さな穴からも光が差し込み、部屋中が真っ白に輝いた。
そして、アリスがその光に吸い込まれるように消えていく。
「アリス！」
すでに光に遮られて全く目も見えなくなった。
そして、劈(つんざ)くような高周波が、僕の聴力も奪った。
何もかもが、白い世界の中に、引き込まれていった。

気がつくと、そこは真昼間の、繁華街のゴミ捨て場に倒れていた。
道行く人々が、さげすむような目で僕を見ている。
子どもが指差して何か言っているが、傍にいる母親が、慌てて子どもの手を引いて連れて行った。
しばらく昼間の光に目が慣れなかったが、いつまでも座り込んでいるわけにも行かないので立ち上がり、ふらふらと歩き出した。
なんだか足に力が入らない。
街の看板に設置してある時計は、12時を少し過ぎたところだ。
家に帰ろうかとも思ったが、やはり会社を無断欠勤するわけにはいかないと思い、そのまま会社に向った。
一応上司には朝、取引先に直行して戻ったことにすればいいだろう。

会社の前についた。
「おはようございます。」
警備の男にいつものように挨拶をしたが、考えてみればもう昼だ。
そのせいか警備員は、しかめ面をしたままこちらを一瞥(いちべつ)した。

「愛想がないな。ちょっと挨拶を間違えたくらいで、あんな目で睨むことはないだろう。」

警備員の態度に腹を立てながら、オフィスのある五階に上がるためエレベータを待った。

エレベータが到着し扉が開いた。

どこかのオフィスの女子社員が乗っていたが、僕を見た瞬間、目を見開いて後ずさった。

そして、僕を避けるように降りると駆け足で玄関に向った。

エレベータに乗った僕は自分の身の回りを見回した。
ゴミ捨て場に倒れていたため、服が汚れているとか、匂いがするとか、何か目立つことがあるのかと思ったが、特に服装に変わりはなかった。

オフィスの五階に着き、事務所の扉を開けた。

「ただ今帰りました。」

数人がこちらを見ていたが誰一人返事を返す者はいなかった。

それどころか、女子社員は立ち上がり、中にはオフィスの奥へ逃げる者もいた。

よく見てみると、知ってる顔が誰一人いない。

そう思っていると、一人の大柄な男が近づいてきた。

「ちょっとあんた。何の用だね。ここはあんたのような人に用はないんだがね。とにかくここを出て行ってくれ。」
「なんだその態度は、俺はここの社員だ。忘れたのか！」
震える声でそういうと男は笑い出した。
「社員？いつの話だ。あんたボケてんだ。とにかく早く出て行かないと警備員を呼ぶぞ！」
「いつ？なに言ってんだおまえは！」
そういい終わらないうちに、その大柄な男に腕をつかまれ入り口の先に放り出された。
しりもちをついている僕を一瞥（いちべつ）して男はオフィスに戻っていった。

いったいどうしたというんだ？
今のはダレだ？
あんなやつは社内にいないはずだ。
思わずオフィスの看板を見た。
確かに僕が勤めている会社名の看板がかかっている。
まさか、一夜にして買収されて社員が入れ替わったとか？
そういう話はイマドキ珍しくはないが、いくらなんでも昨日まで勤めていた会社が、そんなに急に変わることはないだろう。
弱々しく立ち上がった僕は、あまりの周りの変化に、少し気を落

ち着かせようとトイレに向った。

確かにトイレの位置も今までと変わっていない。

ここは僕の会社だ。

用を済まして、手洗い場に立ち、フッと鏡を見た。

もう一度洗い場に目を移した瞬間、今、鏡で見た自分の顔が、脳裏を反芻(はんすう)した。

「え？」

そして、恐る恐る、もう一度、鏡を見た。

「なっ・・・。」

そのまま、言葉を発せなくなった。

その鏡に映っていたのは、髪の毛が抜け落ち、わずかな白髪がぼさぼさに残って、まるで落ち武者のような髪型。

今までの、僕の面影は全くなく、醜い皺(しわ)だらけで、ところどころシミのある顔。

口の周りにも皺が無数にあり、歯はボロボロに欠けていた。

「なんだ。ダレだ、これは？」

いったい、何が起きたというんだ。

そこに映っているのは、明らかに八十歳の老人だった。

一夜にして、歳を数十年も経てしまったというのか。
僕が「有巣倶楽部」で過ごしたのは、ほんの数日で、その間も何も変わらなかったのに・・・。

まるで浦島太郎のように、一夜にして、数十年を竜宮城で過ごしてしまったというのか、これが、一瞬の至福の代償なのか・・・。

身体の力が急に抜けて、その場で座り込んでしまった僕は、少しずつ目の前が暗くなっていくのを感じた。

『これでよかったのか、僕の人生はこれで・・・。』

その日の夕方、オフィスビルのトイレで、スーツ姿の老人の遺体が発見された。

エピローグ

ある街の、深夜の繁華街

「・・・・・・。」

「ん？なんだ？」

一人の初老の男から無言でビラを渡された、中年の男は、そのビラ見た。

「ん？有巣倶楽部？」

そのビラを見た男は振り返ったが、そこには、いるはずの初老の男が、すでにいなくなっていた。

了

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X
	X	X	X	X	X	X

エピローグ（後書き）

長くかかりましたが、完結です。
応援していただいた皆様に感謝です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0952f/

有巣倶楽部（ありすくらぶ）

2010年10月8日15時53分発行